

# 八戸の正教徒パウエル源晟の政治活動

木 鎌 耕 一 郎

## はじめに

本稿の主たる目的は、明治初期に八戸で最初のハリストス正教の洗礼を受けたパウエル源が、やがて自由民権運動に参画し、青森県議員、そして衆議院議員として活躍した様子をできるかぎり具体的に跡づけることである。本稿の着目点は、第一に、明治初期の正教入信者が「国家の革新」という大志を抱き、西洋近代の思想を摂取する過程で受洗したのに対して、ニコライがもたらしたロシア正教は、彼らが向かって行った「近代化」や「西洋化」に抗する宗教であったことである。パウエル源の人生において、両者の齟齬はどのようにして表面化したのかを明らかにしたい。第二に、日清戦争後に高まった反ロシア的な国民感情の中で正教徒が直面せざるを得なかった受難である。青森県で一時期盛り上がった青森港をロシアとの貿易拠点に誘致する運動でのパウエル源の働きに民意が高い評価を与えながら、やがて彼が「露探」のレッテルを張られて激しい攻撃を受けて政界を去らざるを得なかった次第に、その受難の一端を見ることができる。

なお筆者は、別稿<sup>1</sup>で八戸におけるハリストス正教の宣教の概要について記したが、その時は2007年に発行された全9巻からなる中村健之介編訳『宣教師ニコライの全日記』<sup>2</sup>を入手し

ておらず、参照していなかった。『宣教師ニコライの全日記』は文字通りニコライの個人的な日記であり、日々の宣教の実務や来客とのやり取り、各地の教役者たちから送られてくる手紙の内容などに対する自身の思いを、歯に衣着せぬ、時には激情的な表現で記されている。一個人の主観的評価である点も考慮に入れなければならないものの、ニコライが八戸に二度訪れた当時の人物や教会の様子や風景、宿泊した場所などの記録は、日記でしかうかがうことできない貴重なものである。本稿はこの『宣教師ニコライの全日記』の他、青森県の政治史に関する資料をもとに、パウエル源の政治活動に焦点を当てて別稿を補足するものとなる。本稿と同じ紀要に掲載する資料「『宣教師ニコライの全日記』における青森地域・人物等県に関する言及」も、ともに参照されたい。

## 1. 初期信徒の入信動機と政治に対するニコライの姿勢

### (1) 初期信徒の入信動機

ハリストス正教会の布教は、1868（明治元）年にニコライが、澤邊琢磨、仙台藩出身の酒井篤礼、能登出身の浦野大蔵に密かに洗礼を授けたところから始まる。当時は政府がまだキリシ

八戸学院大学健康医療学部人間健康学科

<sup>1</sup> 拙論「八戸におけるハリストス正教会の宣教と源晟」『八戸学院大学紀要第50号』2015年（83-93頁）

<sup>2</sup> 中村健之介編訳『宣教師ニコライの全日記』（全9巻）教文館、2007年。なお、パウエル源が最終的に何故長崎で亡くなったのか、筆者が不思

議に思っていたところ、2017年10月に行われた「安藤昌益資料館開館8周年記念シンポジウム（八戸市 天聖寺ホール）」の席で山下須美礼氏にお会いし、娘婿アンドレイ源珪蔵が長崎領事官の通訳に雇われたこととの関係についてご教示いただいた。このことが『宣教師ニコライの全日記』を読み込む契機となった。ここに感謝申し上げたい。

タン禁制政策を保持していた時期であった。翌1869（明治2）年に、ニコライは日本での本格的な宣教事業に着手するために一時ロシアに帰国したが、その間にパウエル澤邊は、新政府の藩閥政治に対する反発を抱いて函館に集結していた元仙台藩士たちに、「国家の革新は人心の改造によりせざる可らず。人心の改造は宗教の改革よりせざるべからず。宗教の改革はハリストス教を以てせざるべからず」<sup>3</sup>と説き、キリスト教の研究に励み、布教の準備を進めた。1871（明治4）年にニコライが再来日すると、十二名の元仙台藩士が受洗した。

青森県でのハリストス正教会の伝道は比較的最早い時期に始まっている。函館で受洗した者たちが函館と仙台を行き来する際に、その間に位置する南部地方、三陸沿岸地域で布教が行われたからである。1873（明治6）年には、三戸や八戸で伝教者が訪れている<sup>4</sup>。八戸での布教開始について『宣教師ニコライの全日記』には次のように記されている。

八戸の伝教はパウエル源を介して始まった。かれは盛岡にいたころ、イアコフ高屋から正教について聴いた。かれは八戸に帰ると、友人の伴と相談して、一緒に函館の宣教団に正教関係の書物を送ってくれるように依頼した。当時アナトリイ師のもとにいた丹野が書物を送り、これらを源と伴はかれらの周りに集まった二〇人ほどの人たちとともに読み始めた。その後、八戸にイオアン酒井が立ち寄り、全部で三日、かれらに教理を説明した。それからペトル朽木が伝教者としてこの地に派遣されて来て、一年滞在した。明治九年にパウエル沢辺神父が八戸で最初の信徒たちを

洗礼した。サワ山崎が伝教者としてこの地に明治一一年と一二年に滞在した。それからステファン江刺家が昨年の公会までいた。昨年のその公会でパウエル源が当地に任命された。<sup>5</sup>

ニコライは、八戸の布教のキーマンがパウエル源晟であったと認識している。源が「盛岡にいたころ」とあるが、それは一時期彼が、現在の弁護士にあたる「代言人」として活動していた頃のことと考えられる。1875（明治8）年2月15日付で、源が代言人として県参事に建議書を送った記録がある<sup>6</sup>。八戸に裁判所ができる1877（明治10）年以前には、盛岡にあった裁判所に出向くことが多かったという指摘もある<sup>7</sup>。盛岡での布教の始まりも八戸と同様、1873（明治6）年であるが、早くも1874（明治7）年4月に4人、7月に17人が受洗し、翌1875（明治8）年には73名が受洗している。つまり、八戸よりやや早い段階で多くの信徒を獲得し教会の基盤が整いつつあった盛岡で、源はイアコフ高屋から教えを受け、八戸に帰ってから書物を取り寄せ、仲間とともに教理研究に臨んだということになるだろう。

八戸で最初に洗礼を受けた人々のほとんどは士族階級だった。パウエル澤邊やイオアン酒井が伝教に関わっていることから、おそらく八戸での最初期の受洗者たちは、旧仙台藩士が聴いたのと同じように、彼らから「国家の革新は人心の改造によりせざる可らず。人心の改造は宗教の改革よりせざるべからず。宗教の改革はハリストス教を以てせざるべからず」という言葉を聴いたと想像できる。パウエル澤邊が語ったこの言葉の論理構造に着目すると、目的に対する実行方法を示した三つの条件文から成りたっ

<sup>3</sup> 石川喜三郎編『日本正教伝道誌巻之巻』正教会編輯局、明治34年（58頁）

<sup>4</sup> この経緯については、山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の間人々像—北東北における時代変容意識—』清文社出版、2014年の「第二章第一節 受洗者名簿にみる教会の成立」（66-89頁）に詳しい。

<sup>5</sup> 上掲『宣教師ニコライの全日記2』（61頁）

<sup>6</sup> 青森県史編さん近現代部会編『青森県史資料編 近現代I』青森県2002年（133頁）

<sup>7</sup> 中里進「郷土の先覚者たち（1）源晟評傳（上）」『世代十四号』平凡会、昭和23年（7頁）

ていることがわかる。

国家の革新→人心の改造

人心の改造→宗教の改革

宗教の改革→ハリストス正教

すなわち、「国家の革新」という目的のためには「人心の改造」の実行が不可欠である。「人心の改造」という目的のためには「宗教の改革」の実行が不可欠である。「宗教の改革」という目的のためには「ハリストス教」という実行が不可欠である、という構造である。ここで「国家の革新」が最も上位の目的に置かれている点に注目したい。幕末から明治初期の動乱を体験した士族階級にとって、とりわけ戊辰戦争で苦汁を舐めた東北地方の憂国の士にとって、キリスト教へ接近した動機は、宗教的真理の渴望やキリスト教が持つ宗教的な深みへの同調というよりは、むしろ直接的には、新しい時代に即した「国家の革新」という大目的のための実行手段であったことを示している<sup>8</sup>。こうした動機づけは、ハリストス正教徒のみならず、明治初期にキリスト教諸派に入信した人々にも、少なからず当てはまるだろう<sup>9</sup>。

八戸で最初に受洗した人々にとっても、自らの今後の生き方の選択において「国家の革新」という大目的が多かれ少なかれ影響していたと

想像できる。彼らにとって「国政の革新」の実現とは、従来の封建社会の通念や既成概念を打破し、それにとって代わるものとして近代的な合理主義、すなわち西洋文明をもって新しい日本を開化することであった。キリスト教はそのような西洋文明を支える精神的支柱として注目されたのである。

パウエル源晟にまつわるいくつかのエピソードにも、このような近代人の傾向を看取することができる。1890(明治23)年に出版された『衆議院議員候補者列伝：一名・帝国名士叢伝第3編』<sup>10</sup>には源晟の名前と経歴が紹介されている<sup>11</sup>。この書は、数少ない少年期の源に関する情報として、次のようなエピソードを伝えている。源(当時は河原木姓)が八戸城中に仕えていた十四歳の春、多くの者が狩猟に行き城中に人手が足りない中で、たまたま大規模な祈祷が行なわれた。集まった僧侶は数百人だった。源と三、四人の僚友は僧侶たちの給仕を命じられた。源は自分がその身分にないということで争ったが、寺社奉行らに給仕を強いられた。源は怒って、食椀の中に芥子を混ぜた。それを食べてひどい目にあった僧が食椀の中身を取り替えるように言うと、源は天皇から賜ったものを取り替えるべきではなく、謹んでこれをいただくようにと返した。僧は大いに怒ってこのことを寺社奉行に訴えた。寺社奉行は源が少年であるという理由で沙汰無しとしたが、僧はさらに家老に訴え、源たちは訊問された。源は自分一人でやったので他の者は知らないと答え、三日の謹慎を受けたという。このエピソードには、少年期の血気盛んな源が、権威に盲従すること

<sup>8</sup> 中村健之介も次のように指摘している。「ニコライに近づいて『福音伝道の前駆』となったかれら仙台の士族の根にあった動機は、プロテスタントに向かった日本人のそれと基本的に同じであったと考えられる。それは儀礼や神秘に魅かれる宗教的感性ではなく、あるいは苦しむ者が救われようとして綱にすがる依頼の願望でもなく、「国家の事」「人心の統一」を思う武士の志であり、「一事業を挙げ、名をなさざるべからず」という実践的な向上の精神であった」中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波書店、1996年(230-231頁)。

<sup>9</sup> たとえば、日本のキリスト教雑誌の草分けで、神戸で発行された『七一雑報』にも「人心を清むるは真の宗教にして当今開花国といわる、国々にて人々信じ順がふ所の者にして即ち真神の教へなり」(1876(明治9)年2月11日)と記されているように、明治初期のキリスト教入信者の多くにとって、文明開化とキリスト教は不可分なものであった。

<sup>10</sup> 大久保利夫『衆議院議員候補者列伝：一名・帝国名士叢伝第3編』六法館、明治23年(1143-1147頁)。

<sup>11</sup> 源晟が青森県会議員に初当選したのは1886(明治19)年で、その後、衆議院議員に当選したのは1894(明治27)年である。すると、『衆議院議員候補者列伝』が発行されたのは明治23年であることから、源は少なくとも、県政に携わって数年後という早い段階に、すでに国政に参加する意欲を見せていたことがわかる。

なく封建社会の常識に抗して行動した痕跡を見ることができる。

パウエル源が藩から謹慎を命じられたエピソードは、もう一つある。1871(明治4)年5月、源は藩に東京留学の願書を届けたものの、許可がおりないまま出立したため、東京の藩邸で10日間の謹慎処分を受けている。若い頃の源晟の、藩の仕来りに抗してまでも自らの目的に向おうとする大胆な姿勢には、近代人の個人主義的な特性を読みとることができる。同年7月に河原木姓を捨て、源晟と改名<sup>12</sup>したことにも、個人主義的な性向が表れているように思われる。

このような性向を涵養した要因の一つに、洋学の学びがあると思われる。源は、藩校で文武の他、岩泉正意から数学や洋学を学んでいる。岩泉正意は、盛岡藩の日進堂で大島高任から英語、物理、化学、博物、応用科学などを学び、八戸藩校で英学寮長となり、八戸における洋学の振興に努めた人物である。岩泉がジョン・スチュワート・ミルの「代議政体論」や「ミルトン論」を翻訳していることは注目に値する。

上述した源の東京留学は、数カ月余りで中断された。1871(明治4)年に廃藩置県が断行されて9月末には青森県という行政区が誕生し、藩費での留学が困難となったからである。しかし、帰郷後の源は、一時期、八戸藩校の洋学部教師に名を連ねている他<sup>13</sup>、『衆議院議員候補者列伝』には、1872(明治5)年の夏に、岩手県の久慈で学校を開いて教頭に雇われたとも記されている<sup>14</sup>。

なお八戸では、同年に岩泉正意と英国人ル

ーが西洋思想を教える私塾を開業し、1875(明治8)年には、おそらくその私塾を発展させた学校として、蛇口胤親が夜学「開文学舎」を自宅に開いた。「開文学舎」には、後に源とともに受洗し、政界で活動をともしする関春茂が学んでいる他、やはり源の政治活動の盟友となる奈須川光宝、浅水礼次郎などが学んでいる<sup>15</sup>。岩泉の教え子である源は、帰郷後も岩泉のところに出入りしていたであろう。つまり、岩泉を通して洋学、とりわけ西洋政治思想を学修した教え子たちから、青森県政に携わり、議会制政治を体現していく者が輩出されたわけである。彼らのこのような経歴には、西洋思想によって啓蒙された近代人という特性を見ることができる。

「国家の革新」という上位の目的の実現手段としての西洋文明の学びに積極的だった人々が、その延長線上にハリストス正教に出会ったとすれば、入信者の中から後に政治活動に邁進する者が出てくることは、ごく自然な流れだったと考えることができる。そのほとんどが士族階級である八戸の最初期の受洗者が正教の教えを受容した背景には、「国家の革新」を上位の目的とする論理への同調があったと考えられる。体制に阿ることのない個人主義的な性向をもち、洋学を通して近代的合理主義を吸収し、西洋政治思想に触れて進歩的な議会制民主主義を学んでいたパウエル源晟にも、そのような論理を受容する素地が整っていた。

## (2) 政治に対するニコライの姿勢

一方で、宣教師の側にとって、パウエル澤邊が用いた上記の条件法は、必ずしも当てはまらなかったと思われる。そのことはとりわけ、ニコライに当てはまる。ニコライにとっては、正教の信仰を日本人に根づかせることこそが最も上位の目的であり、「国家の革新」ということ

<sup>12</sup> 上掲「郷土の先覚者たち(1)源晟評傳(上)」(6頁)、および八戸近代史研究会『きたおう人物伝 近代化への足跡』デーリー東北新聞社、1974年(46頁)を参照。

<sup>13</sup> 八戸教育史編さん委員会『八戸市教育史(上)』八戸市教育委員会 昭和49年(128頁)に、「明治四年一月から十二月まで八戸藩学校で教育を受けた小島穂積」による情報として、三人の教員の一人で「洋学部の先生」に源晟の名がある。

<sup>14</sup> 上掲『衆議院議員候補者列伝』(1144頁)

<sup>15</sup> 上掲「八戸におけるハリストス正教会の宣教と源晟」86-87頁



はその実現手段としてすら眼中になかったようである。

上述のパウエル澤邊が語った条件法は、ペトル石川喜三郎が『日本正教伝道誌』の中で記したものである。1899（明治32）年のニコライの日記には、石川が同書の記述をニコライに読み聞かせた場面が記されている。ニコライは同書について「石川は十分な資料を集め、活き活きと詳細に記述しており、さながら歴史物語だ。神意の糸が随所に見える」と評価しつつ、パウエル澤邊ら最初期の受洗者の入信動機について、次のような感想を漏らしている。

それにしても、最初の動機に純粋な宗教的欲求のなんと少ないことよ！宗教的な飢え、真理の探究心の少なさはもちろんだ。教えが受容され、育まれるのはまったく偶然の原因によるもので、動機は国の役に立とうということだ。教えは精神の表面にとどまり、キリスト教の影響は魂の内奥には及んでいない。パウエル沢辺〔琢磨〕は、キリスト教の洗礼を受けて二年もたってから、友人たちの生活費を用立てるためサムライ精神を発揮して妻を娼家に売ろうとしたのだ。こんな例は枚挙にいとまがない。<sup>16</sup>

ニコライの言う「偶然の動機」という表現は、「国家の革新」を志し、それを上位の目的とした明治初期のキリスト教入信者の特徴を言い得ている。多くの日本人は、新しい日本の国づくりが始まる時代に、西洋文明を吸収する過程で、キリスト教を受容した。とりわけ英米からのプロテスタントの宣教師は、西洋文明から学ぼうとするエリート青年層の欲求に応じて、英語教育を武器に日本社会の近代化の礎を築き、文明開化に貢献しようとした。ところが、ニコライがもたらした正教は、他のキリスト教諸派とは事情が異なっていた。この点に関して、中村健

之介氏は次のように解説している。

ニコライが伝えた東方正教の一つであるロシア正教は、簡単に言えば「近代化」「西洋化」「文明開化」に抵抗する宗教であった。近代化とは、宗教の非宗教化の動きである。

そのロシア正教が、近代化、西洋化の波に乗って日本に入ってきたのである。<sup>17</sup>

近代化に抗するロシア正教を日本人に根づかせようとするニコライと、近代化を積極的に求めようとする日本人、この両者はどこかでずれ違うはずである。そのことを示すひとつのエピソードが、1893（明治26）年の日記の内容に見られる。この年の5月、ニコライは青森県を巡回していた。ニコライが黒石から弘前に到着したときのことである。弘前に派遣されていた伝教者ペトル伴義丸（源晟とともに八戸で最初に洗礼を受けた一人）が、教会で「演説会」を開催する手はずを整えてニコライの来訪を待っていた。これに対してニコライは激昂した。日記には次のように記されている。

家の前には、習慣に反して、だれもおらず、大きな紙を張った看板が目に入り、そこには大きな字でわたしの名前がかかれていて、わたしがきょう「演説」をすると公示されていた。わたしのほうへ飛び出してきた伝教者伴に、わたしはこの看板を撤去するように命じ、教会堂に入ったが、そこにもかまどのそばに座っている三人の若者以外にだれもいなかった。（中略）

「ここではキリスト教はプロテスタントによってのみ知られています。プロテスタントがやっているように演説をしなければなりません」〔伴のセリフ〕

わたしは我慢できず、伴をこっぴどく叱った。ろくでもないわれわれの伝教者たちのう

<sup>16</sup> 『宣教師ニコライの全日記 6』（42 頁）

<sup>17</sup> 『宣教師ニコライの全日記 1』（65 頁、注 6）

ちの何人かが異教徒の猿真似をしようというこのような意図が、わたしにはひどく忌まわしいものを感じられる。お手本は聖書や教会の歴史の中だけにある。われわれ正教徒が、このキリスト教の変わり種を、つまり、教理さえもなく、「説教」もなく、あるのはただこの忌まわしく空っぽなおしゃべりである「演説」だけのプロテスタントを真似るなどということは我慢できない。このように自分自身を侮辱し、正教の「布教者」につばを吐くことは、だれであっても激怒するだろう！<sup>18</sup>

ここで話題となっている弘前のプロテスタントとは、メソジスト派のことである。弘前では、慶應義塾で学んだ菊池九郎が旧弘前藩の藩校をもとに開いた東奥義塾を舞台に、本多庸一も加わり、明治初期の段階でメソジスト派の宣教が積極的に行なわれた。宣教の端緒は、東奥義塾に赴任した英語教師のジョン・イングの働きである。イングは、横浜でアメリカ・オランダ改革派の宣教師 S・R・ブラウンと J・H・バラの私塾で学んで洗礼を受けた本多庸一が、バラの推薦を受けて東奥義塾の英語教師として連れてきた人物である。本多はイングとともに東奥義塾の学生を中心に勢力的に伝道した。イングが赴任してから半年後の 1875（明治 8）年 6 月には、東奥義塾の上級生 14 人が受洗し、7 月にはさらに 8 人が受洗した。弘前とその周辺地域には講義所が複数設けられ、受洗した学生たちは連れだって精力的に布教に励んだ<sup>19</sup>。当初は、東奥義塾を通して士族階級の知的エリート青年層に広まったメソジスト派は、明治中期になる

と平民層にも浸透していった。1891（明治 24）年に設立された藤崎美以教会は、商人や農民からなる自給教会であった<sup>20</sup>。

このようにメソジストの地盤が堅固だった当時の弘前地区において、ペトル伴が伝教活動に難儀していたことは明らかである。ニコライも、上の引用箇所後に、「弘前は、おそらく、布教するには良くない土地である。きっとまだ早いのだ。メソジストが二〇年ここで全力を傾けた」と記し、信徒獲得が難しい地であるとの認識を示している。

なお、弘前においてメソジストの伝道活動の主体と自由民権運動の主体は重なっていた。1879（明治 12）年に、東奥義塾の教師や学生を中心に政治結社「共同会」が結成されているが、その指導者は上述の本多庸一や菊池九郎であった。共同会の会員は、毎週のように「演説会」を催し、国会開設や憲法の制定などの民権思想を訴えかけたという<sup>21</sup>。彼らの布教と民権運動は、「近代化」「西洋化」「文明開化」への啓蒙活動でもあったと言うことができよう。

ペトル伴が「プロテスタンがやっているように演説をしなければなりません」と語ったのは、弘前で成功を収めているメソジスト信徒たちが、布教においても民権運動においても「演説」を多用して人心を掴んでいた様子を目の当たりにしていたからであろう。しかし、そのようなプロテスタント的手法を用いようとするペトル伴に対して、ニコライは我慢ならなかった。なぜなら、ロシア正教の「お手本は聖書や教会の歴史の中だけにある」のであり、ロシア正教にとって「近代化」「西洋化」「文明開化」は世俗的で非宗教的なものにすぎないからである。

ニコライは、正教が日本に広まったのは政治と結びついていないからだと考えていた。東洋学者で日本留学中にニコライと親交のあったボ

<sup>18</sup> 『宣教師ニコライの全日記 3』（296-297 頁）。〔 〕は引用者の補足。

<sup>19</sup> 「當時學生信徒は、受洗せば必ず傳道せざるべからざりき。されば彼等は三々五々に連れだちて、定日弘前付近—中部、熊島、悪戸、濱町—は勿論、定日に黒石に出張せり」（日本メソジスト弘前教會『弘前教會五拾年略史』大正十四年（8 頁））

<sup>20</sup> 拙著『青森 キリスト者の残像』イー・ビックス、2015 年の「第六章 弘前におけるメソジスト派の宣教」（113-123 頁）を参照。

<sup>21</sup> 同上。

ズニューエフは著書『ニコライ大主教の大いなる事業』で、日本において正教が普及した理由に関するニコライの分析を、次のように説明している。

十六世紀にすでに日本人の中には少なからぬキリスト教徒がいたのである。ところがキリスト教は政治と結びついて、そのために日本の最も優れた統治者たちまでがキリスト教を禁じる命令を出すという結果を招いた。(中略)

十六世紀に「日の出づる処の国」へやって来た政治的陰謀をこととするキリスト教に、日本はつかまらなかった。そこにニコライ大主教は、日本の歴史における神の特別の慮いの手を見ていた。それと共に大主教は常に次のことを言われた。すなわち、いまや時代は全く変わったのであり、日本におけるキリスト教宣教は政治とはいかなる関係も持つことなく行なわれるのであり、従って、各人のキリスト教の受容は自由であり、かつ国民にも政府にも危険をもたらすおそれはないのだということである。(中略)

このように故大主教は、日本における正教の弘通の理由として、何よりもまず日本に一般にキリスト教を受け入れる準備態勢ができたということをあげている。弘通の第二の条件としては、正教が政治との関係から全く切りはなされていることがあげられている。<sup>22</sup>

このように政治を宣教の道具には用いない姿勢を有していたニコライからすれば、受洗当初のパウエル澤邊の姿に「純粋な宗教的欲求」、「宗教的な飢え」が少なく、「国家の革新」という「偶然的動機」によってキリスト教に帰依したことを嘆いたのも当然であろう。同様に、正教入信に際して「国家の革新」という上位の目的を抱

いていたであろう八戸の源晟に対しても、同じような思いを抱いたと想像できる。少なくともニコライが、後述のように、伝教者を辞して政界入りした源晟に対して、厳しい眼差しを向けるようになったことは確かである。

## 2. 源晟の政治活動

### (1) 伝教者と民権運動の両立

パウエル源は、1876（明治9）年10月に八戸で受洗した後、東京の伝教学校で学び、翌1877（明治10）年7月には副伝教者として八戸地域を担当している。さらに1878（明治11）年4月には千葉県下総郡、同年7月には秋田県久保田に4か月、その後山形県庄内や新潟県で伝教し、1879（明治12）年7月には岩手県大館等の伝教者となった。翌1880（明治13）年7月の公会で故郷の八戸地域の伝教者となった。『衆議院議員候補者列伝』の履歴によれば、その後も函館や宮城県での伝教に携わっている。

1881（明治14）年6月に、ニコライは東北地方の巡回の折に初めて八戸を訪れており、『宣教師ニコライの全日記』にはパウエル源の伝教者としての具体的な働きについて記されている。それによると、「現在、源が行なっている伝教の概要」として、①「月の四の日と九の日に女性を相手にルカに因る聖福音の講義」を源宅で実施、②「毎週月曜」にルカ中里宅で「マトフェイ〔マタイ〕に因る聖福音の講義」、「源の指導のもとに輪講」、③「五の日」には「 로마人に達する書〔ローマの信徒への手紙〕の講義」を教会にて、④「七の日には夜、魚町で伝教のために借りた家の二階で伝教が行なわれた」という。ただしこのうち③と④は、この日記の時点で中断している<sup>23</sup>。また、日記にはニコライがパウエル源の家を訪ねた際の記録として、次のような記述がある。

<sup>22</sup> ボズニューエフ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』講談社、昭和61年（43頁）

<sup>23</sup> 上掲『宣教師ニコライの全日記2』（61頁）

かれの家はごく普通の士族の家で、かなり古いように見えた。家族構成は八三歳になる老婆と妻と二人のこども——一二歳と六歳——、これに本人を加えて総計五人である。「あの子が家にいないと困る」と老婆は言うが、源のほうは「家族が丈夫なうちは、一年でも二年でも、教会が行けと言えば他所へでも行けます」と言う。<sup>24</sup>

この時期のパウエル源は、八戸の信徒に対して福音書やロマ書の講義を行うなど、伝教者としての役割を実直にこなしていたことがわかる。さらに教会の命に従い、どこにでも伝教に行く覚悟も表明している。

このように伝教者として各地で布教活動を行う一方で、パウエル源はすでに民権主義的な運動を活発化させている。1880（明治13）年4月に八戸で、マルク関春茂やアンドレイ井河元寿などの八戸の正教徒の他、奈須川光宝などの岩泉正意の教え子らによって、自由民権運動の結社である暢伸社が結成されると、パウエル源もそれに加わった。翌1881（明治14）年に暢伸社のメンバーは、馬産事業への県の課税をめぐる争議に端を発する「産馬紛擾事件」で、馬産者側に立って県との折衝に活躍する。この時期の源は、伝教者の活動と自由民権的な活動を両立していたといえる。ただし、八戸の正教徒の社会的な影響力は、八戸地域の信徒獲得には直接結びつかなかったようである。この点について、山下須美礼氏は次のように指摘している。

暢伸社が産馬農民の声を代弁して青森県と闘った、いわば農民側に立った存在であったにもかかわらず、正教会の伝教が農民に広がり、農民層を教会に取り込んでいくというような展開は見られなかった。政治活動と伝教活動は同時並行で進められてはいたが、彼らのなかで切り離されたものとして認識されて

いたか、もしくはもともと指導層であった士族による産馬紛擾事件の主導は、彼らの指導層としての立場をより強固なものとするにはあっても、同じ信仰を共有するというような関係を築くことには、容易に結びつかなかったのである。<sup>25</sup>

『衆議院議員候補者列伝』に「同年夏上京シ大井憲太郎氏ノ紹介ニヨリ自由黨ニ入り」<sup>26</sup>とあるように、1882（明治15）年の夏にパウエル源は、おそらく公会のために上京した折に、正教徒で法学者の自由民権運動家だったパウエル大井憲太郎を介して、自由党に入党した。この前年の2月6日に、八戸の信徒である川崎子英の逝去に際し、パウエル源は喪主となってキリスト教式に死者を埋葬したため告訴され、「懲役三十日、贖罪金貳円廿五銭」の判決を受けた<sup>27</sup>。この頃、各地の正教徒の間で同様の訴訟が相次いで起こっていた<sup>28</sup>。このような訴訟に、代言人をしていた大井憲太郎が弁護を務めたことが知られているので<sup>29</sup>、源と大井との関係は埋葬事件に関連しているのかもしれない。いずれにしても、民権主義の立場から自由党に入党することで、本格的に政治活動に身を入れる心づもりであったことがわかる。

<sup>25</sup> 山下須美礼「明治初期のハリストス正教会と政治的活動」友田昌宏編著『東北の近代と自由民権——「白河北」を超えて』日本経済評論社、2017年（237-238頁）

<sup>26</sup> 上掲『衆議院議員候補者列伝』（1145頁）

<sup>27</sup> 上掲「明治初期のハリストス正教会と政治的活動」（246-247頁）を参照。なお、『衆議院議員候補者列伝』では「十三年二月八戸ニ歸ル偶川崎子英病ニテ死ス耶蘇正教ノ式ヲ以テ南宗寺舊墓ニ埋葬ス寺僧之ヲ告發ス終ニ違令ニ問ワレ懲役四十日罰金三圓ニ處セラル」（1145頁）とあり、日数と金額が若干異なる。また同書では、この僧は、少年期の源が祈祷会の給仕にあたり、食椀に芥子を入れられて家老に訴えた同じ僧であるとされている。

<sup>28</sup> 埋葬事件については、上掲の山下須美礼「明治初期のハリストス正教会と政治的活動」（245-248頁）を参照。

<sup>29</sup> 牛丸康夫『日本正教史』日本ハリストス正教会教団府主教庁、1978年（75頁）

<sup>24</sup> 同上（63頁）



当時、中央で板垣退助や後藤象二郎らが展開していた国会開設運動は全国に波及し、地方の自由民権運動を担う結社によって支持されていった。青森県では弘前を筆頭に津軽地方に多くの民権主義的な結社が立ち上がっていたが、八戸では暢伸社がそれに当たる<sup>30</sup>。運動の高まりを受けて、1881（明治14）年10月12日によりや国会開設の勅諭が出され、1890（明治23）年の国会開設が約束された。

やがて行なわれる国政選挙に対応するには、県政での政治活動が不可欠であった。そのような中、1882（明治15）年の第三回半数改選選挙で奈須川光宝が初めて県会議員に当選し、1884（明治17）年の第四回半数改選選挙で浅水礼次郎も初当選する。さらに、1886（明治19）年2月に、パウエル源が青森県議会第五回半数改選選挙で県会議員に初当選、マルク関春茂も1888（明治21）年の第六回半数改選選挙で初当選する<sup>31</sup>。こうして定員5名の三戸郡選出の県会議員の席は、暢伸社のメンバーが占めることになった。パウエル源は、県会議員に当選した後、伝教者を辞した。

## （2）県政時代

暢伸社のメンバーが県議会で活動するようになった時期に、青森県内で最も大きな政治的事件は1888（明治21）年の夏に起こった鍋島知事の「無神経事件」と後藤象二郎の来県に端を発する「大同団結運動」である。この二つの出来事に、パウエル源がどのように関与していたかを見ておこう。

当時の知事は政府から派遣された官吏であった。青森県では1886（明治19）年7月から元元老院議員の鍋島幹が知事を務めていた。彼は官憲擁護の立場にあり、保守派の人材を郡長に

登用するなどして、民権派を弾圧した。1888（明治21）年に起こった「無神経事件」とは、7月28日の官報に掲載された「本県如きやや無神経の人民なれども」という表現が火種となり、民権運動を担う県内各地の有志から、鍋島知事に対する抗議と辞職勧告の声が上がった出来事である。この抗議運動は弘前から始まり、青森、八戸にも波及し、やがて事件は中央紙でも報じられるようになった<sup>32</sup>。八戸では暢伸社のメンバーが知事への抗議運動を行っている。次に引用する鍋島知事宛ての「上書」を記した「青森県三戸郡有志総代」には、源晟、関春茂、奈須川光宝、浅水礼次郎ら、県会議員の名が含まれている。

官報は知事の預り知らぬところとか、一時の言であるというが、東津軽郡某集会議席で「かくの如き野蛮地には云々」といったことはみな知っているとおりだし、昨年本郡巡回中「この地蒙昧の民なれば神仏に迷わされ云々」は自分らも耳にしたところである。数年来県令において郡長戸長公選の建議をしたが、これを採用せず、他県人を迎えてこれに当てた。本県五十万人中一人の適任者もなかったというのか。無神経のことが官報に出てから所在の郡長戸長ら俄かに辞職するに至った。これでは何時の日にか上下の調和を見ることができよう。（後略）<sup>33</sup>

次に「大同団結運動」である。自由党は国会開設を政府に認めさせた後、政府の弾圧と党内の分裂によって勢力を失い解党したものの、1887（明治20）年には後藤象二郎が旧自由党系の自由民権運動の諸派に大同団結を呼びかけた。この運動は地方にも広がっていった。後藤が東北遊説の一環として青森県を訪れたのは、翌1888（明治21）年の8月である。青森県の

<sup>30</sup> 河西英通「青森県の大同団結運動」『弘前大学国史研究』弘前大学、1986年（41-63頁）

<sup>31</sup> 県議会選挙の当選者については青森県議会史編纂委員会編『青森県議会史自明治元年至明治二十三年』青森県議会、昭和37年を参照。

<sup>32</sup> 「無神経事件」については、同上（751-753頁）を参照。

<sup>33</sup> 同上（753頁）

民権派が先の「無神経事件」において、津軽地方と南部地方に関係なく、官憲に対する抗議という同一の目的のもとに共同で戦ったこともあり、「大同団結運動」に呼応する自由党系諸派の全県的な団結は勢いづいた<sup>34</sup>。

後藤の青森県遊説は、大館から弘前に入り、青森、八戸という経路だった。『衆議院議員候補者列伝』には「廿一年後藤伯東北遊説ノ際暢神社委員トノ出迎ノ爲メ弘前ニ行キ懇親會ニ臨ミ又浪岡青森ノ懇親會ニ列シ伯ト共ニ八戸ニ來リ懇親會ヲ開キ席上痛切ナル伯カ演説ヲ聴キ爲メニ大ニ地方人士ノ志氣ヲ振起シテ暢神社亦尋テ振フニ至レリ」<sup>35</sup>とあることから、パウエル源は弘前の遊説からすべてに参加したことがわかる。弘前の菊池九郎が発行人となって同年12月6日に大同派の新聞として創刊された「東奥日報」紙の編集人として源晟の名が見られるのも、地域を越えた当時の大同団結の勢いを物語っている。

大同団結の運動の高まりにより、八戸では1889（明治22）年10月19日に「土曜会」が結成された。土曜会の幹事は、奈須川光宝、パウエル源晟、浅水礼次郎で、三名の常議員の中にマルク関春茂がいた。これに対抗して商家層を中心に組織されたのが改進黨系の「公民会」であった。公民会の指導者は大芦梧楼、遠山景三らである<sup>36</sup>。両者の対立は激化し、官憲に反抗的な土曜会に対しては、警察からの弾圧があった<sup>37</sup>。

このように県内の政治結社は、自由党系の大同派とそれに対抗する改進黨系の改進黨に分かれる形となり、県議会選挙や間近に迫った衆議院選挙に向けた争いが激化していった。

県内各地の自由党系の大同派の諸団体や有志は、後藤の遊説を機に、政談演説会や懇親会を何度も開催した<sup>38</sup>。パウエル源は津軽地方で開催される懇親会にも足しげく参加しており、1889（明治22）年11月3日に東津軽郡小湊で開かれた「公同会小湊支部懇親会」、同年11月13日に青森丸吉楼で開かれた「第八回有志懇談会」で、演壇に立ったメンバーの中に名前を見ることができる<sup>39</sup>。

1890（明治23）年2月の県議会半数改選選挙でパウエル源は再選した。この年、第一回衆議院議員選挙が開かれ、第一区（東津軽郡、上北郡、下北郡、三戸郡）では土曜会の奈須川光宝と、同じく大同派の工藤行幹が当選した。第二区で当選した榊喜洋芽および第三区で当選した菊池九郎も大同派であり、青森県での最初の国政選挙は完全に大同派の勝利となった。

同年11月の臨時県会で、パウエル源は県会副議長に当選した。翌1891（明治24）年8月には、府県制施行後の初の県会議員選挙が行なわれ、三戸郡からはパウエル源の他、マルク関春茂が初当選している。ここでも大同派が優勢となった。ただし前年から帝国議会で地価修正案が提出される動きがあり、この案は東北地方

<sup>34</sup> 後藤象二郎の青森遊説と大同団結運動については、同上（754-756頁）、および上掲「青森県の大同団結運動」を参照。

<sup>35</sup> 上掲『衆議院議員候補者列伝』（1146頁）

<sup>36</sup> 八戸社会経済史研究会編『概説八戸の歴史下巻1』北方春秋社、昭和37年（115-116頁）を参照。

<sup>37</sup> 土曜会発足当時の様子が次のように記されている。「こうしてはなばなしく発足した土曜会にたいして翌明治二十三年八月九日、集会及び政社法が發布されるとともに、八戸警察は源晟と浅水礼次郎の二人に出頭を求めてきた。これは土曜会は政社と認められるゆえに、法によって政計届を提出せよ、というものであり、さもなくば即刻解散せよ、というものだった。源・浅

水の両名はこれに対して、同じような団体である三戸郡公民会にたいしては、なぜこのような事をせずに土曜会のみ政社として取締るのかと警察に抗議したが、警察はこれにはとりあわず、ただちに政計届を提出せよ、さもなくば違反者として処分すると恫喝した」八戸市議会編『八戸市議会史記述篇上』八戸市、昭和53年（54頁）

<sup>38</sup> 青森県有志大懇親会に発起人、賛成人、参加者のいずれかで三回以上関係した人物を抽出した河西英通氏の調査によると、源晟は参加8回中、発起人が1回、賛成者が4回、参加者が1回であった。上掲「青森県の大同団結運動」（63頁）を参照。

<sup>39</sup> 大同派の会合については、上掲『青森県議会史自明治元年至明治二十三年』（770頁）を参照。

の地価を高く修正することで地租の値上げを想定していたため、これに対しては、県内の大同派も改進黨も共同で反対運動を行なった。三戸郡からはパウエル源、マルク関、浅水礼次郎が陳情のために上京している。反対運動は東北地方の他、中央でも行なわれ、地価修正案は否決された。9月には臨時県会が開かれ、パウエル源は県会議長に当選し、4名の参事会員の一人にマルク関が選ばれた<sup>40</sup>。

パウエル源が県会議長を務めた時期に行われた八戸での交通事業に、八戸線の敷設がある。東北本線は1891（明治24）年9月に青森まで開通していたが、八戸町は本線の尻内駅から離れていた。その原因は諸説あるが、どうやら地元の農民や馬山業者が鉄道の必要を感じていなかったようである<sup>41</sup>。しかし1892（明治25）年のある日、パウエル源とマルク関が知事を訪ねた際、日本鉄道社長が同席しており、尻内駅に余った鉄道資材があるので八戸まで支線を通すことを提案された。源と関は土曜会にこの件を持ち帰り、第百五十銀行頭取の大久保平蔵と階上銀行頭取の泉山吉平を推して、この二人が知事および日本鉄道と折衝にあたり、八戸線の敷設が決まった。支線開通までに停車場の位置や土地の買収の問題で、パウエル源は采配を振るったという<sup>42</sup>。

1894（明治27）年3月、前年12月の衆議院解散を受けて行われた第三回衆議院議員選挙において、青森県では自由党が推したパウエル源が第一区で当選した。この選挙でも改進黨は大敗した。一方、中央で自由党系の組織が合同して革新自由党を組織した。これを受けてパウエル源ら4人の青森県選出議員は革新自由党に入党し、青森県自由党もまた、名称を革新自由党に改めた。6月に衆議院は解散し、9月に第四回衆議院議員選挙が行なわれ、パウエル源を含めて同じ顔ぶれが当選した。

ところで、パウエル源が県会議長をしていた時期に、ニコライが巡回のため青森県を訪れている。1893（明治26）年5月に、ニコライは岩手県から北上し、三戸、八戸、三本木、青森、黒石、弘前を巡回した。パウエル源は、三戸から八戸に向かうニコライを出迎えて随行し、青森でも人力車15台で華々しく出迎えた<sup>43</sup>。この時のニコライの日記から、パウエル源の家族についていくつかのことが判明する。まず、パウエル源の長女であるマリア源ヒデは、東京の宣教団の女学校を卒業し、八戸の教会で勉強会や祈祷のための集会を行っていた。マリア源ヒデは、1876（明治9）年に八戸で最初に受洗した26人のうちの一人で当時は6歳であった。また、同じく最初の受洗者の一人で東京の宣教団の神学校を卒業後、ロシアのペテルブルグ神学大学に留学して神学士となったアンドレイ源珪蔵がヒデと結婚した<sup>44</sup>。アンドレイ源珪蔵は結婚後にヒデと東京に移り、神学校の教師となっている。なお、ニコライは青森の教会のメトリカ（信徒名簿）をチェックして、「八戸から来たパウエル源〔晟〕の家族が五人」<sup>45</sup>と数えており、青

<sup>40</sup> 地租改正案に対する青森県における反対運動については、青森県議会史編纂委員会編『青森県議会史自明治二十四年至大正元年』青森県議会、昭和40年（53-55頁）を参照。

<sup>41</sup> 東北本線が八戸町から離れて敷設された理由について、上掲『概説八戸の歴史下巻1』には次のように記されている。「(1) 市民の迷信ないし後進性、(2) 土地買収の困難、(3) 経済状態の悪化、(4) 交通業者の反対などがあったようである。このほかに陸軍ことに参謀本部が、軍事上の観点から原則として海岸を通る予定の路線に反対を唱え、これが一時、八戸の本線問題についての真相として伝えられたこともあった」(172頁)

<sup>42</sup> 八戸線敷設の経緯については、上掲『概説八戸の歴史下巻1』(180-182頁)、上掲『青森県議会史自明治二十四年至大正元年』(95-96頁)、八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史近現代資料編1』八戸市、2007年(348-354頁)を参照。

<sup>43</sup> 上掲『宣教師ニコライの全日記3』(289-295頁)

<sup>44</sup> 同上(289-290頁)。なお、別の日にニコライが函館から青森に着いた時のことを記した日記から、マルク関春茂の息子も、東京の神学校に在籍していたことがわかる。「病気になるってしまった神学生関の父親（いま青森の「県会議員」をしている）も来た」(『宣教師ニコライの全日記5』(159頁)

<sup>45</sup> 同上(294頁)

森では「泊まるところはパウエル源が自分のところに用意してくれ、妻ワルワラとともにたいへん親切にむかえてくれた」<sup>46</sup>と記していることから、この頃のパウエル源が、家族とともに青森に移り住んでいたことがわかる<sup>47</sup>。

### (3) 国政時代

衆議院議員に当選したパウエル源は、国政の場でどのような活動をしたかについては詳らかではないが、パウエル源が国政入りした1894(明治27)年は、日清戦争が始まった年と重なっていることは注目に値する。日本は翌年、下関条約で遼東半島や台湾を割譲させたが、すぐにロシア、ドイツ、フランスによる三国干渉が行なわれ、日本は遼東半島を清に還付せざるをえなかった。その後ロシアは中国大陆での影響力を強めていく。このことから日本人の反ロシア感情が急激に高まり、後の日露戦争に行きつく。つまり、パウエル源の衆議院議員時代は、国民の中に「ロシア憎し」の声が高まっていく時期に相当する。ここでは、三国干渉直前の1895(明治28)年の2月から3月にかけて、青森県で起こった対ロシア貿易港の誘致運動におけるパウエル源の活動を、「東奥日報」紙の記事をもとに跡づけてみたい。

日清戦争中の日本国内では、ロシアを横断するシベリア鉄道が間もなく全通することから、戦後にロシアとの貿易が振興されるという展望があった。シベリア鉄道全通によって始まる貿易による経済的な利益は、イギリスやドイツな

ど当時の列強国の関心事でもあった<sup>48</sup>。そのような中、青森県では青森港に対ロシア貿易を担う拠点港を誘致するため、1895(明治28)年に「對魯貿易港期成會」を立ち上げ、運動員に県会議員の工藤卓爾を定めて衆議院特別委員会に働きかけるとともに<sup>49</sup>、青森県選出の代議士が関係各方面に働きかけていた。その中でも正教徒であったパウエル源の活躍が際立っていた。

同年2月20日の「東奥日報」紙には、青森貿易港案を衆議院に提出したパウエル源が陳述した「對魯貿易港案提出の理由」が掲載されている。それによると、青森港は非常に広く水深が深いため、多くの船舶が停泊しても不都合はなく、東北本線が開通して三陸地方や北海道の物産の輸出入がすでに行われている。奥羽本線により、秋田県や弘前地方からの貨物を扱うことができる。北海道の函館よりもシベリア(西利比亞)方面の輸出入の拠点港として最適であり、ウラジオストック(浦塩斯徳)からの距離

<sup>48</sup> 「去る十七日露國公使館に於て目下我國に來遊中なる彼國大藏省參事官ザブーキン氏主人となり榎本農相及五二會々頭前田正名しを聘聘し宴會を開きたるが同夜の談は西比利亞鐵道落成の暁は如何にして日露貿易を盛大ならしむるや彼の西比利亞の商利を占領せんとし虎視眈々たる英吉利又は獨逸の計畫畫に對し將來日本は如何にして之と軒輊すべき平等重なる談話なりし由」(「東奥日報」明治28年2月22日付)

<sup>49</sup> 「青森港に於て露國に對する貿易法律案は前号にも掲げたる如く既に特別委員の手にありて目下審査中なれば其の運命も目下に迫り居る次第にして一刻も猶豫すべきにならざるを以て運動員工藤卓爾には着京の翌九日より十一日にかけて日夜奔走して各委員を訪問し具に青森貿易港の必要及び其の希望等を陳述したるに各委員に於ては皆な之れには異議なき有様なれば委員會の通過は疑ひなかるべきのみならず、菊池、源の兩代議士にも非常の尽力を爲し居る事なれば此勢ひにて尚ほ一層の運動を繼續せんには本會の通過も望みなきにあらざる模様なりという」(「東奥日報」明治28年2月15日)。運動員の工藤卓爾は、改進黨から前年の衆議院議員選挙でパウエル源と同じ第一区から立候補して落選している人物であることから、この時の対ロシア貿易港の運動が全県的な運動だったことがわかる。

<sup>46</sup> 同上(295-296頁)

<sup>47</sup> 同上(294頁)。なお、パウエル源の議長時代に、県会書記長を務めた浦山助太郎の回顧によると「あの頃の宿賃は上等で二円から二円五十銭くらいだったと思うが、私の宿は柳町の小笠原宇八のやっていた家族的な旅館で、関春茂、源晟、奈須川さんらの自由派の人達が大部分ここを常宿にしていた。一晩二円くらいでしたネ」(上掲『青森県議会史自明治二十四年至大正元年』(103頁))とあり、宿屋を利用していた時期もあったようである。



も北海道を除いて青森が最も近いことなどを、強くアピールしている<sup>50</sup>。

ただし、衆議院特別委員会ではロシアとの貿

易港の候補として、青森港の他に「越前の敦賀」、「筑前の唐津港」なども挙がっていた。さらに政府は、目下の条約改正に全力を注ぎたいので、ロシア貿易に関する開港地の選定は条約改正が完了した後に行なうべきとの考えから、反対の意向を示していた<sup>51</sup>。このため、パウエル源らは大蔵大臣の他、外務省、農商務省を訪問して嘆願活動に奔走している<sup>52</sup>。

ロシアにとってもシベリア鉄道全通後の日本との貿易は関心事であった。日本からの輸出品はこれまでイギリスやフランスなどの西側諸国を介して行われていたが、ロシア本土から日本海に鉄道が達すれば、日本と直接貿易が可能になるからである。そのことを裏づけるように、3月初めの「東奥日報」紙には、ロシアの東洋貿易事務委員やロシア陸軍の中将で商務局参事官のザブーキンなる人物が、皇帝の勅命を受けて商況視察員として来日したという記事が掲載されている<sup>53</sup>。

<sup>50</sup> 「本案は過日敦賀貿易港案の議事に上ほりたる時に於て同委員に附托する事になり居れるものなれども更に日程に登りたれば聊か其の理由を述べ置かん抑も青森の港たるや港口頗る廣くして水亦深く數白の船舶を容れ大船巨船を碇泊せしむるも何等の不都合を感するなく其便利なる處なり加之東北鉄道の全通以來三陸地方の物産にして北海道及西比利亞地方に輸出し或は彼れよりして内地に輸入し来る貨物の集散地とはなれり而して又奥羽鐵道も二十有餘哩の開通を見るに至れる爲め秋田縣並に弘前地方の貨物も亦集合するの便を見るに至れり然れば其科目は如何ばかり集合し居るや此の如く樞要の知而かも良港にして交通の便あるにも拘はらず割合に少數の貨物を輸出し居るなり即ち酒、味噌又醬油、米等の少數に過ぎず何が故に此の良資格を供へたる港にして其の輸出物は斯くの如く少數なるや蓋し青森港は特別輸出港たらざるが故に彼の最も此等貿易上見込める西比利亞方面に向て直ちに輸出するを得ずして或は函館の如き或は小樽釧路の如き迂路を経由すべき多くの手数と日数と費用とを要すればなり唯此不便は此の良港たる此の運輸に便宜しき青森をして多くの貨物を輸出せしめざるなり故に若し青森港をして其の販路を擴め西比利亞に向つて貨物の積卸を致す事を得ざしめんには尠なくも當時の貨物の三四倍の集散を多からしむるや必せり而して若し青森港に向つて此の便を與ふるに至るも別段税関を設けて官の手数を増し多くの金圓を費するの憂なし何となれば函館より此地に臨時の出張員を置くも可なり又出張所を設くるにもせよ僅かに一年五六百圓にて支ゝるを得ん是れ函館の出張所たる釧路小樽に無く推知すべきなり加之青森には収税署も在る事なれば此處に此の事務を取扱はせて差支へなからんのは勿論の事少しも費用を要せざるを得べし聞く今後五六年を経過せば彼の西比利亞鐵道も全通にべしと此の時に當り彼れ浦塩斯德より我邦に来るべき航路は北海道を除いて青森より近きはなし乃ち青浦蘭の里程は僅に四百廿海里に過ぎず若し將來に於て西比利亞鐵道の全通と共に浦港の益々盛大を得たしの際には此の最も近き而かも適當なる青森は單に積卸等を許可するのみならず開港場とも爲さざるべからざるに至るべきなり故に今日に於て是が積卸を許さんには現在の貿易上に利益を與ふるのみならず將來此貿易を發達せしむると實に疑ふべからざる所にして唯り貿易上に利するのみならず國家經濟上に於ても甚だ利益なるべしと信ず是れ實に國家の爲めに等閑に附すべからざる問題にして茲に之れお提出する所以なり」(「東奥日報」明治28年2月20日付)

<sup>51</sup> 「當青森港を始めとして越前の敦賀、筑前の唐津港等に於ける對魯貿易港案は衆議院特別委員に附され審査中なるが之に對する政府の意向は反對なる由にて頃日同委員會開會の際政府委員も出席して述べたる處なりと云う聞くに 今や政府も銳意條約改正に従事して既其の端緒に就き益々其に歩を進めつゝなるおとなれば遠からずして此の大業を完了するを得ん然る上は全國中何れの場所を以つて貿易港とし或は開港場と爲すべきや政府は公平の目を以つて適當の場所を決定する括なり然るに其の事業未だ成らざるに先ちボツ、抜き、に開港されては外交の順序上如何にも其の當を得ざらずは敢て其の事につきて絶對の反對はあらざるも時機の未だ至らざる爲の勢ひ反對せざるを得ず云々」との論旨にてなりし由」(「東奥日報」明治28年2月26日付)

<sup>52</sup> 「源代議士を初め各委員一団には大蔵大臣を訪ひて此の事を談じたるに同大臣は例に依りて別項の如き趣旨を以て反對せし(中略)相分かれ夫れより外務省、農商務省をも訪問して賛成を求めたる…」(「東奥日報」明治28年2月26日付)

<sup>53</sup> 「露国皇帝閣下の使命を帶び東洋貿易就中日露貿易の状況視察の爲め過般に京地に滞在中なる全國東洋貿易事務委員は今度滞京中の函館露國領事ウシチブ氏と共に去る一日(或は一兩日中に發足すべしとの説は眞ならん)京地を發足し當地を経て函館へ赴く旨の通牒なりしとのこと」(「ザウーキン氏は露国陸軍中將にして商務

パウエル源はロシアからの商況視察員の来日を知り、早々にザブーキンが滞在していた築地の旅館を訪問した。このことが「源代議士魯國商況視察員を訪ふ」という3月5日の記事に記されている。記事によると、この訪問に際してパウエル源は、自分の娘婿で、正教の神学校を終えてペテルブルグ神学大学に留学し、帰国して東京の神学校で教授をしていたアンドレイ源珪蔵を通訳として伴っていた。ザブーキンはパウエル源を喜んで迎え、シベリア鉄道が全通した暁には、日本から鉄、銅、硫黄などの需要品を供給できるよう貿易港が必要であり、ウラジオストックと接している青森港はそれに適していると思われるので、「近々全港の視察旁々北海道を漫遊する筈なり」と述べた。そしてパウエル源が、青森港をロシアとの貿易港にするための建議を議会に提出している旨を伝え、ザブーキンはたいへん満足して激励したという<sup>54</sup>。

ザブーキンと随行書記官二名が函館駐在のロシア領事ウスチノフに案内されて北海道を視察する時に、青森港にも立ち寄ることが明らかになると、誘致運動の関係者はにわかに色めき

だった。

3月5日、運動員の工藤卓爾から、衆議院の特別委員会で審査中だった「青森港對魯貿易港案」が委員会を通過したことが議長に報告されたという電報が、「對魯貿易港期成會」に届いた<sup>55</sup>。また、3月8日の衆議院議会において「對魯貿易港法案」が審議の結果、衆議院を通過したことが、パウエル源から青森の渡邊佐助のもとに届いた<sup>56</sup>。さらに、パウエル源から佐和知事に対して、商況視察員ザブーキンが函館のロシア領事ウシチブと随行員二名とともに、3月9日に青森への直行列車で出発するとの報せが電報で届いた。

この段階では、視察員一行が、青森港を視察した後に函館に行くか、もしくは直接函館に向かい帰路に青森港を視察するのかは不明であったため、青森町の重鎮たちが視察員の接待について協議を始めている<sup>57</sup>。

視察員一行が到着する予定の3月10日の紙上では、青森町の主だった有志が集合して協議し、まず小田桐町長の他3名が一行を浅虫で出

局参事官なり今回西比利亞鐵道開通の時に備ふる爲め露帝乃勅命を蒙り商況視察委員として本邦に渡來し東京築地中央ホテルに滞留す」(「東奥日報」明治28年3月3日付)

<sup>54</sup> 「今回魯國商況視察員の來朝し居れるを機とし去る二十五日源氏の令息珪蔵氏(魯國神學士)を通辭として同視察員ニコラス、サブーキン氏を築地の旅館に訪問して日魯貿易に関する意見を聞きたるに同氏は大に之れを喜び種々の談話を爲し(中略)日本より需要品を供給せられざるべからず而して其需要品は鉄、銅、硫黄等の類にして従て先ず之れが貿易港を要することとなるが予は本邦浦塩斯德港と接せる青森港の如きは最も適當なるものと信じ居ることなれば近々全港の視察旁々北海道を漫遊する筈なりと述べられたる由にて源氏も其貿易の必要を信じ且つ青森港は之れに関しては適切な良港なるを以て全港をして對貿易港となさんとの建議を議会に提出したる事を語られしにザブーキン氏には痛く満足を表し尚ほ今後充分な尽力を以て其の目的を達するに勉められんことを希望したりと云ふ」(「東奥日報」明治28年3月5日付)

<sup>55</sup> 「當青森港對魯貿易港案は特別委員會に附され審査中なりしがいよいよ昨日を以て委員會を無事通過し議長へ廣告になりたる由にて昨日午前十一時三十分發の電報は運動員なる工藤卓爾氏より對魯貿易港期成同盟會へ達しさり其の本議に附せらるゝも数日の中になるべし」(「東奥日報」明治28年3月6日付)

<sup>56</sup> 「豫ねて報道し置ける對魯貿易港法案はいよいよ昨日の衆議院議事日程に上はりたる審議の末無事同院を通過したる旨一昨晚源代議士より當地渡邊佐助氏の元まで電報ありたりと云ふ」(「東奥日報」明治28年3月10日付)なお、衆議院議会における議論の詳細は「東奥日報」3月12日付の記事に掲載されており、本案件の名前が「陸奥國青森港に於ける露領浦塩斯德及西比利亞沿岸貿易」であることがわかる。

<sup>57</sup> 「魯國商況視察員ザブーキン氏には滯京中なる函館魯國領事ウシチブ氏及び隨行員二名と共にいよいよ本日の直行列車にて出発する旨源代議士より佐和知事の元まで電報ありたる由なるが同一行には一先づ當港に足を止め充分當港を視察の上函館へ赴くべきや一説には當地へ着すと共に同夜直かに渡函し當港の視察は帰途の際にすべしと云ふものあり」(「東奥日報」明治28年3月9日付)

迎え、この日一行が青森に滞在することがわかれば11日丸吉楼に招待して饗宴を催すことに決まったことが伝えられている<sup>58</sup>。ただし、同日の記事には、パウエル源から佐和知事に届いた手紙に、視察員一行は函館からの帰路に青森港を視察する筈である旨が記されていることも報じている<sup>59</sup>。

結局、ザブーキン一行が青森に到着し、小田桐町長らが「かぎや旅店」で会見して函館より前に青森港を視察してくれるよう促したが、一行は帰途に立ち寄ることを約束して同日夜9時40分の船で函館に向かった<sup>60</sup>。

なお、この時に関係者がザブーキンと交わした会話の内容が、3月13日の紙面で詳論されている。それによると、ザブーキンは青森町関係者が語る青森港の利便性のアピールに一定の期待を寄せる一方、衆議院に提出された法案が日本人の船舶のみ出入りできるという内容であることを「残念に感じた」と語っている。ここから、ロシアが日本との「直接貿易」を念頭に視察員を派遣したことがわかる。青森町関係者は、本来は各国の船舶が利用できる「純粹の開港場」になることを希望しているが、政府がそれを認める算段がないため、まずは日本の船舶だけが出入りできる港を希望したのだと弁明し

ている<sup>61</sup>。なお、ザブーキン一行は、早くも3月12日に函館を発ち、青森に到着した。この日、佐和知事や小田桐町長ら関係者は一行を招待して盛大な酒宴でもてなし、視察員一行は翌日東京に戻った<sup>62</sup>。

ザブーキンが帰京した後もパウエル源と運動員の工藤卓爾は、各方面に働きかけを強めていった。3月20日には、ロシア公使とザブーキンが招かれた榎本農商務大臣や京阪地区の実業家との会合が開かれ、源と工藤はこれに出席することを許可された。彼らは、通訳として源の娘婿アンドレイ源珪蔵を伴って会合に出席した。ザブーキンは、源らに青森での歓待に感謝を述べ、酒席では源らと懇ろに交流したとされる。「東奥日報」の記事は、こうしたことは「畢竟源氏が露國人に交際縁故あると青森町民が懇にザブーキン氏一行を優待したるの結果なるべし」として、ロシア通であるパウエル源を引き立てている<sup>63</sup>。

<sup>61</sup> 「ザ氏曰く（中略）諸君が議會に提出されたる法案は獨り日本人のみの利益の爲め日本の船舶に限り荷物の積卸を許すとのことは如何 委員曰く左ればなり吾人に於ては純粹の開港場と致し度は本来の希望成り然らざれば相互利益を享受する能はざればなり然れども今日の場合純粹の同港場とすることは政府の容易に同意せざらんことを恐れ先づ兎に角日本船舶を許されんことを希望したる所以なり」（「東奥日報」明治28年3月13日付）

<sup>62</sup> 「露國商業視察官一行の招待會」についての記事を参照（「東奥日報」明治28年3月14日付）。

<sup>63</sup> 「公使及びザブーキン氏には深く青森の好意に満足し源氏を始め貴君にも面謝せんと申居れば今有是非同會へ臨まれたしとの求めに付工藤氏は早速承諾し直ちに源氏を訪問して之れを諮りたるに源氏の喜んで承諾しられたるのみならず通辭の爲に令息珪蔵氏をも伴ふこととなり斯くて時刻を期し源、工藤の兩氏は同道して同會に至りたる（中略）源氏は令息珪蔵氏と共に工藤氏は譯官鈴木氏と共に公使及びザブーキン氏の前に出てさるに兩氏とも懇懇に握手し深く青森人の至誠にして眞勢なる表情を感謝する旨を述べ（中略）ザブーキン氏には態々源工藤兩氏の前に来り酒杯を好感して尚ほ丁寧に談笑せし由なるが尤もザブーキン氏が斯れ態々來りて胚を交換せしは發起人大谷氏より谷類なきとなれば座中の衆客も皆氏等三人の親密好情なるに注目し衆稠坐の中にて一方ならぬ面目を施したる由に

<sup>58</sup> 「…協議を爲したる末先づ本日は小田桐町長、木村田司、大坂金助、松森豊の四氏をして浅虫迄同一行を出迎えしめ尚ほ同日當地に滞在することになる時には翌日丸吉楼に招待して饗應を爲す筈なりと云ふ」（「東奥日報」明治28年3月10日付）

<sup>59</sup> 「此の程源代議士より佐和知事に送られたる書信によれば同一行の當港視察は函館よりの帰途にする筈なりとのことなり」（「東奥日報」明治28年3月10日付）

<sup>60</sup> 「夫より小田桐町長及び松森豊の兩氏には直に同一行をかきや旅店に訪問して種々の談話を爲し函館に趣かざる前當地滞在視察の事を促したるに是非帰途立ち寄るべしとのことに函館出發の際には電報を以て報知する旨答へられ全九時四十分乗船したるが其の際にも一同見送くりたる由なるが同一行には大に有志者の信切を感謝したりと云ふ」（「東奥日報」明治28年3月12日付）



以上のように、1895（明治28）年2月から3月にかけて、青森県ではロシアとの貿易港の誘致運動が高まる中、前年に衆議院議員に当選したパウエル源はその運動のために奔走していた。正教徒であるパウエル源が、ロシア留学を果たしてロシア語に堪能な息子の働きも味方につけて、商況視察員ザブーキンに青森港の利便性をアピールして好印象を引きだす様子を、地元の青森では強い関心をもって報道し、その働きを高く評価した。パウエル源にとってもロシアと日本の友好関係は大いに望むところにちがひなく、この運動に意欲的に取り組んだことが想像できる。

ところが、同年4月に入って日清戦争の講和交渉が進んで下関条約が締結されると、ロシア政府は遼東半島を放棄するように日本に迫り、フランスとドイツもこれに同調した。この三国干渉に対して、日本は従わざるをえなかった。さらに、ロシアは満州に鉄道の敷設する動きを見せ、日本国内では反ロシア的な感情が急激に高まった。

三国干渉後のロシアに対する敵対感情の高まりは、日本の正教会の受難の始まりであった。東京の正教会本部は、ロシアを憎む日本人からの襲撃に備えて警察が警護に当たったという事実からも、当時の緊迫感がうかがわれる<sup>64</sup>。

同時に、このようなロシアに対する国民感情は、正教徒であるパウエル源の政治活動にとっても、大きな逆風になったはずである。青森にロシアとの貿易港を誘致する運動におけるパウエル源の活躍は県民から高く評価され、ロシア通として称賛されたが、日清戦争後のロシアとの政治的対立を機に、彼の立場は逆転したと

推測できる。実際に、パウエル源が政界を去ることになる選挙では、後述のように、彼が正教徒でロシア通であるがゆえに、敵国側の人間として攻撃の対象となっている。

『宣教師ニコライの全日記』によると、この年の7月<sup>65</sup>と8月にパウエル源がニコライを訪ねている。8月の訪問でパウエル源は、正教会が利用している箱根の温泉施設での療養をニコライに申し入れている。

夕方にパウエル源が訪ねてきた。女生徒たちが塔ノ沢から帰ってきたら、そこに一ヵ月いかせていただきたいとわたしに頼んだ。パウエル源は心臓に脂肪が沈着する病気に苦しんでいるので、医者は転地療養を勧めているそうだ。〔塔ノ沢の管理人の〕ミヘイ〔日比〕に、源が塔ノ沢でしばらく過ごすという内容の手紙を書くことを約束した。<sup>66</sup>

この時抱えていた病がロシアに敵対する国民感情の高まりから来る心労によるものかは、勿論不明であるが、一ヵ月の転地療養により体を休めるとともに、そのような国内世論によって蓄積された精神的疲労も癒したい気持ちであったと想像することは許されるだろう。

#### （4）政界を追われる

1894（明治27）年3月と9月の衆議院議員選挙で青森県選出の代議士となったパウエル源は、再選をかけた1898（明治31）年3月15日の選挙で落選した。これは単なる落選ではなく、パウエル源が政界を追われる結果を招く出来事であった。この選挙をめぐるパウエル源の行動については不明部分が多い。その背景にどのようなことがあったのか、いくつかの説明を拾い上げてみたい。

まず『八戸市議会史』の説明によると、当時

て是をも畢竟源氏が露國人に交際縁故あると青森町民が懇にザブーキン氏一行を優待したる結果なるべしと云ふ」（『東奥日報』明治28年3月12日付）

<sup>64</sup> 当時の正教会をとりまく状況については、中村健之介『ニコライ——価値があるのは、他を憐れむ心だけだ——』ミネルヴァ書房、2013年の「第十二章 三国干渉とロシアを憎悪する日本」（221-238頁）を参照。

<sup>65</sup> 『宣教師ニコライの全日記4』（48頁）

<sup>66</sup> 同上（60頁）



の中央政界において進歩党と自由党が合流して憲政会をつくる動きに応じて、八戸の自由党系の土曜会と進歩党系の公民会が合同することが決まった。ところが、土曜界の重鎮であったパウエル源と、公民会の大芦悟楼がこの動きから外れて、「別行動」をとったとして、次のように説明される。

ここで土曜会の源と公民会の大芦というそれまでのうごきとは全く別な組合せができ、奈須川・関の土曜会系に公民会の遠山という勢力ができあがる。そして間もなく行なわれた総選挙で源と奈須川が対決し、奈須川が代議士に当選して源は落選という結果になった。<sup>67</sup>

では、パウエル源はなぜ「別行動」をとったのか。その理由について『概説八戸の歴史下 1』では「日清戦争その他に示された日本の帝国主義化と、自由党と政府の妥協に対する源の抵抗」という中里進氏の説を紹介している。すなわち、パウエル源は自由党左派として地租の引き上げや軍事費の増強に反対しており、その立場を貫くために、青森県選出の他の3人の代議士が進歩党に入党した時、自らは丙申倶楽部に入ったという。この行動の理由は、「変質しつつあった自由党本来の伝統を死守するのあまり、自由党と袂を分かち、その反動として長年の敵対者と結びついた」<sup>68</sup>からであるとされる。また、小野久三氏は、パウエル源が「別行動」を選んだ理由について、当時の野党が反ロシア的な政策を主張していた点を視野に入れ、次のように記している。

日清講和条約締結直後の三国干渉の中心はロシアであった。ロシア皇帝がその首長をかねたギリシヤ正教会の八戸における最初の受洗者である源の立場は対露敵愾心でかたまっていた当時の民心とそれを代弁した野党のそれとは同調しがたかった。“源は伊藤——つまり一時的にも政府の政策に接近しなければならなかったのではないか。この不満から、本県選出の革新党菊池九郎、工藤行幹、白鳥慶一の三代議士が改進黨と組んで進歩党を樹立したが、源は彼らと行動を共にすることが出来ず、少数派の丙申倶楽部に入った。この源の動きは当時としては背信行為だった。議会の解散とともに、県の大同派はいかつて源の立候補をみとめず、奈須川を買ったのである”<sup>69</sup>

パウエル源が「別行動」をとった理由について、以上のような見方がある。パウエル源が選んだ道は、彼がこれまで行動をともにしてきた県内大同派から見れば、背信行為に相当した。そのため、選挙期間中の「東奥日報」紙には、パウエル源への激しい攻撃の論調が現れる。

注目されるのは、パウエル源の転向を追求し、その背信を糾弾する当初の論調が、やがて選挙戦が白熱するにつれて、反ロシア的感情に基づく正教徒パウエル源に対する攻撃へと変容している点である。

1898（明治31）年2月24日付の「東奥日報」紙の雑報に、「第一区の形成《源氏と村谷氏と提携す》」という記事があり、源の転向の経緯を伝えている。まず、青森県の進歩党は第一区の候補者に徳差藤兵衛を押して、八戸の土曜会の候補者と提携することを決めていた。土曜会では候補者の推薦を源晟に決めたが、源は承諾

<sup>67</sup> 上掲『八戸市議会史記述篇上』（61頁）

<sup>68</sup> 上掲『概説八戸の歴史下巻1』（125-126頁）。なお、同書はパウエル源の別行動の理由として、土曜会内部においてパウエル源が奈須川や浅水と思想上の疎隔が生じていたことや、八戸市内では公民会が優位であった点も挙げつつ、この問題について「正直にいうとよくわからない」「結論は後の研究に譲らざるを得ない」と記している（126-127頁）。

<sup>69</sup> 小野久三『青森県政治史（2）明治後期編』東奥日報社事業局出版部、昭和47年（214頁）。引用文後半は「雑誌『北方春秋』昭和三十三年七月発行…八戸社会経済史研究会、八戸の自由主義者たち」からの抜粋とされるが、筆者は未確認である。

する前に十日間の猶予を請うたという。その間に源は、村谷有秀と秘密裏に会合を重ね、進歩党八戸支部なるものを開いたとされる。そこで進歩党青森県支部は、源の代わりに土曜会の奈須川光宝を候補者に推すことを決めたという。この記事は、源の行動を「嗚呼源氏の行爲早速政事家として政友に對する交誼を露呈も有せざるもの其心事の醜且陋なる洵に嘔吐に堪えざる」と強い論調で批判している<sup>70</sup>。

「東奥日報」紙の3月1日付の「南部候補の由來」という記事には、取材が進んだためか上記の記事よりもやや詳しい経緯が紹介されている。これによると、衆議院議院が解散した後、源は奈須川光宝に手紙を出して出馬の意向があるかどうかを問うている。奈須川が立候補しないのなら、自分が立候補しようと考えていたようである。これに対する奈須川の返事はなかつ

たが、源は福田祐英なる人物を関春茂に会わせ、源が公民会の大芦氏から政治交渉を受けていることを伝えている。

交渉の内容は、当時、八戸町議会の多数派勢力だった公民会派の半数勢力を土曜会派に譲る代わりに、公民会派の遠山景三を県議員に推してもらおうというものだった。さらに、今回の衆議院選挙では、源晟を候補者とし、次回は奈須川、次々回を大芦にすることを要請している。関春茂はこの交渉話を斥け、仲間と相談して源を八戸に帰らせた。

土曜会では総会を開き、源の代議士としての働きは芳しくなかったが、解散による総選挙であるから前代議士に世論を代表してもらうのがよいとして、進歩党青森県支部の意向である徳差藤兵衛との連合を条件に、源を候補に推すことにした。ところが源はこの条件への返答を十日間待つように要請した。そして、この猶予期間中に田中藤二郎<sup>71</sup>や村谷有秀が八戸を訪れて、源に何事かを密談していったとされる。

問いただされた源は、土曜会の浅水礼次郎に對して土曜会の総会を再び開催することを請うた。再総会場で、条件を無視して賛成多数で首尾よく候補者になるためである。これに對して浅水は、条件を無視するのであれば敢えて再総会の必要はないと返答した。浅水は源の行爲を「拙策」とし、三十年來の知己がばらばらになることを惜しんでいる。源はまた、奈須川が県議を辞職して立候補するならば自分は立候補を断念するとも語ったとされる。

こうして大芦と福田が進歩党八戸支部を作りあげて源と村谷の両者を候補者とした。関春茂、江渡種助、川守田大次郎の三人が源を説得したが、源は耳を貸さなかったとされる。そこで進歩党青森県支部は、奈須川を推すことになる。奈須川は簡単には承諾しなかったが、最終的に

<sup>70</sup> 「先此土曜會に於ては進歩黨の徳差氏と提携すへき候補者の豫選會を開きたるに前代議士源晟氏當選したるに何故か其承諾を十日間猶豫あらんことを請い來りぬ（中略）源氏は既に土曜會の候補者として推されたる以上は徳義上徳差氏と提携せらるなからざるに一方には十日間猶豫を請いなから他方には新潮會議に浅虫會議に進歩黨の反對にたつへき村谷氏と會合して謀議を凝らし形勢の自家に利あらんには徳差氏を棄て、村谷氏と提携せんと密かに期する所ありしなり嗚呼源氏の行爲早速政事家として政友に對する交誼を露呈も有せざるもの其心事の醜且陋なる洵に嘔吐に堪えざるものありて存す（中略）源氏が十日間の猶豫を乞ひたる其間に密會又た密會交渉又た交渉の結果として遂に源晟氏は村谷有秀氏と提携して第一區の野に鹿を爭ふことになりたる事實を暴露するに至れるなり斯くて提携は村谷氏と源氏との間に成れりも而して両氏の名を列記せる名刺は配布せられ愈々相携えて選挙場裡に馳驅することとはなりぬ第一區の光景既に斯の如く變せり是に於てか進歩黨青森縣支部は其豫選會に於て推したる徳差藤兵衛氏の外更らに南部地方に於て提携すへき他の候補者を選定せざるへからざるの期に際會をり協議は始まり交渉は重ねられたり其結果は如何曾て初期議院に第一區に於て代議士の月桂冠を冠き現に縣會議長として政界に於て優に先輩を以て推さる奈須川光寶氏遂に起て徳差氏と提携する事に決せり斯して源しか徳義を顧みず政友を欺くの行爲によりて荏苒決するに至らざりし」（「東奥日報」明治31年2月24日付）

<sup>71</sup> 田中藤次郎は、1895（明治28）年に青森県會議員、1902（明治35）年から衆議院議員に三度當選している。

は候補者になることを受け入れた<sup>72</sup>。

<sup>72</sup> 「聞くか如くんは其因縁昨今に起こりたるに非ず最近の衝突は昨々議会解散の時に在り当時源氏は奈須川氏に書を飛して今回候補者に打ち出つの意あるや否やを問い若し奈須奈〔ママ〕氏にして打ち出つるとせば依然滞京す可く然らずんは歸國其の準備に取り掛かる可きを以てせり奈須川氏は之に向て一片の返事だも爲さるしに次で福田祐英氏を歸八せしめ従来の政敵たる大芦氏より協働の交渉ありたるの故を以て関春茂氏に告げて曰く『大芦氏は公民會派の勢力を集めたる八戸町會議員の半数を土曜會に譲り縣會議員を公民派より遠山景三氏を以て之に充て這回は源氏を候補者と爲し次きは奈須川氏を選出せしめ其次には大芦氏自身選出さるゝを望むと』関氏は直に之に答て『交渉の事項に人名迄附し來るは失敬千万の話ならんや』とて斥けしも尚同志に談合し飛電して遂に源氏の歸八を促したり

源氏は歸八せり然れども源氏の東京に於ける行爲は兎角の批難ありしに拘らず解散後の議會なれば前代議士を推薦し輿論を代表せしむるの方針にて土曜會の總會を開き引續き三戸郡有志の豫選會を開きて源氏を候補者に推薦し徳差藤兵衛氏と連合す可きの條件を付せり源氏此條件に對して十日間返答の猶豫を請ひぬ斯間田中藤二郎氏來八村谷氏亦歸縣の途次八戸に立寄り何事か源氏に密談して去り人心動搖めた來て源氏の返答を促せり

源氏は土曜會幹事淺水禮二郎〔ママ〕に語て再總會の開會を請求せり其意に曰はく『總會を開かば條件を無視し而して多數賛成の下に首尾能く候補者たるを得可し』と淺水氏之に答へて『條件を無視すとせば敢て總會を開くの必要なし徒らに總會を開き壯士利用の拙策に依て君の意志を達するは君の爲めに惜む所焉んぞ條件を拒絶するの男らしき挙動に出でざるや三十年來の知己に離る交誼自ら忍びざる所ありと雖も政見の衝突を奈何せん』と源氏黙然答ふるなし源氏は亦放言して『奈須川氏にして候補者たるの念意あらば宜しく縣會組織以前に辭職して打ち出つ可し然らば予は候補者を断念せん』と云へぬ斯くして時日は推移せり大芦氏と福田氏は進歩黨八戸支部を一夜作りて届出て村谷、田中氏等に交渉して發會式を挙げ源、村谷の兩氏を一區候補者に推薦して兩氏承諾の披露を爲せり源氏は條件に對して返答の猶豫を請ひ置きながら村谷氏との提携を承諾せるは取りも直さず有志豫選會の條件を無視せるものと謂はざるへからず是に於てか同志の人々談合して関春茂、江渡種助、川守田次郎の三氏を委員として源氏の反省を促したるに頑然として聞き入る可の色なかりき

茲に至て有志相謀り奈須川氏を起して候補者の承諾を求めたり奈須川氏容易く肯するの色なか

投票日が近づくにつれて、「東奥日報」紙上には源に対する攻撃がエスカレートしていく。2月25日の「見番の権利者も政界の有力者か」という記事では、村谷と源が開いた大懇親会の発起人の中に、芸者屋の元締めである「見番」の名前があることを取り上げて中傷している<sup>73</sup>。

3月3日の「源晟氏の昨今」という記事では、独自の動きをとった源が、親戚からも候補を辞退するように勧められ、本人も今では勝算がないと見て後悔しており、奈須川に交渉して候補者を降りてもらい、自分と徳差が連携するともちかけたが、今更それはかなわないと論じている<sup>74</sup>。

また同日の紙面には、「公憤生」を名のる投稿者の公開状が掲載されている。投稿者は、源

りしも大勢の傾く所今更避くる事能わず殊に難きを他人に譲るの場合にもあらざればとて遂に候補者たるを承諾して突如陣頭に躍るゝに至れる次第なり」と（「東奥日報」明治31年3月1日付）

<sup>73</sup> 「村谷、源なんぞ云へる烏合黨の候補者は本日

を以て大懇親會とやらを金森樓に開くと云ふ其機関誌は此等烏合黨懇親會の發起者として二号活字もて田中氏等以下の姓名を列記せり其中當地方の有力者として原子某をも加へぬ某は人も知る濱町芸妓見番の権利者なり嗚呼見番の権利者而かも彼れにありては尚有力者ならん烏合黨の候補者源晟、村谷有秀…見番の権利者原子某恰好の候補、格好の有力者」（「東奥日報」紙明治31年2月25日付）

<sup>74</sup> 「氏の始めて起つや意氣頗ぶる昂り及公にして足を舉ぐれば第一區は響の如く應じ來らんと然るに現今の形勢より見れば事意外に出で如何なる手段を以てするとも到底勝算なきに至りたるより其失望謂はん方なき有様なるが獨り之のみならず氏の妻の弟なる丹藤某の如き當初より全氏の村谷氏と提携するの不可なるを唱道し断然反對の位地に立ち來りしが近來の形勢を見て更に源氏に向つて候補辞退の勸告を爲し切りに説得するところあるより氏も大に閉口して頗ふる悔悟の色あり及ち更に奈須川氏に交渉して同志の候補者たるを止めて貰ひ更に徳差氏と提携せんとの考あり奈須川に對して右の趣旨にて交渉を始め居る由なれども奈須川氏とて今更中止は出來べくもあらざる次第なれば此の考察も到底畫餅なるべし」（「東奥日報」明治31年3月3日付）



が「露教」を信仰し、かつては伝教者であったことを指摘した上で、「露教」の教えが国境を排して世界が一つの人種として一致することにあるという「世界博愛主義」を説くものと説明する。

そして、源がこれまで提携していた政友を離れて敵対する勢力と手を結んだことでその不徳義を非難し、「汝の敵を愛せ」という聖書の教えや「世界博愛主義」を信仰する源だからこそできた行為であったと皮肉っている。

さらに、これまでの代議士としての源の振舞いは「博愛主義経済主義露教主義」の三主義に基づいており、結果として、他の代議士たちが国民的政府の建設のために政府を弾劾している時に源は行動を起こさず、「隠通議員」と言われたと指摘し、国民の望む代議士とは言えないので「自知の明あらは請ふ候補を断念して政界を去れ」と忠告している<sup>75</sup>。

投票日前日の「東奥日報」紙には、「孤憤生」と名の投稿者から「第一區選挙者に警告す《賣

國奴を選む勿れ》」という公開状が掲載されており、源に対する攻撃の過激さがさらに増している事がわかる。この投稿者は、源をめぐる「露國の探偵たる醜評」を並べ、「ニコライ堂の鐘突き」呼ばわりし、「國民たるの資格も無き」と強硬に弾劾している。

また源が代議士になることができなかった暁には、また「ニコライ派牧師」となるはずで、彼の姿は日本人であるが、精神は「露國の奴隷とする非國民」に他ならず、そのことは参謀本部や警視庁の知るところでもあると指摘し、三国干渉後の「ロシア憎し」の国民感情を味方につけて、正教徒パウエル源を徹底的に売国奴扱いしている<sup>76</sup>。

3月15日に行われた衆議院議員選挙の青森県第一区（有権者 2,966 名）の結果は、徳差藤兵衛が 801 点、奈須川光宝が 721 点で当選し、村谷有秀が 543 点、源晟が 471 点で落選した。さらにこの年、第三次伊藤内閣のもとで 6 月

<sup>75</sup> 「足下は是れ露教を信仰するの人、曾て傳道に従事せるの牧師、足下一世の希望志願亦之に外ならざるべし、蓋し慈愛を説き世界の人種を以て一團とせんこと務めしは耶蘇の教なり、（中略）足下頃日従来提携し來りし政友と相離れ、（中略）然れども生を以て之を見れば是亦足下心胸の宏大無邊なると、露教の高遠深奥を知らざるによるのみ、足下已に魯人と刎頸の交をなす、眼中豈に民黨吏黨として區々たる政友政派あらんや、寧ろ責むるもの、不見識なるのみ、聖書に曰く『汝の欲する處は之を人に施し汝の敵を愛せ』と是れ宗教の大骨髓にして足下の如き世界博愛主義を採り露教の奥意を悟るものにあらざれば其真味を知るを得ざるなり。（中略）人足下の大度宏量に驚き人呼て隠通議員と云ふ亦謂なきにあらざるなり。（中略）是故に生は足下従來の行爲に鑑み舉動に照し、政友諸氏に向て足下が懷抱する所博愛主義経済主義露教主義の幾分を悟らしめんとせしも（中略）足下は其會に自由黨にありし時、革新黨にありし時進歩黨にありし際も、始終一貫の此三主義を確守するに余念なきものなりしなり。（中略）生は足下を以て國民が熱望する代議士たるを信する能はず、（中略）足下自知の明あらは請う候補を断念して政界を去れ、是れ足下萬金の策なり」（『東奥日報』明治 31 年 3 月 3 日付）。ここでは「足下」が源晟、「生」が投稿者である。

<sup>76</sup> 「源某の醜聲あるは最早隠れ無き事實なり、彼れ既に國を賣らんと試むるもの豈に友を賣らんと試みざらんや、今回の彼が舉動は正に之れを証して余りあらん、既に友を賣る、豈夫れ選舉區民諸君を賣らずといふべけんや、（中略）諸君にして若しも彼の用所を問はるゝならば吾人は一言以て答へんのみ、曰く『ニコライの鐘突き』の外他に一藝なしと（中略）源某の國民たるの資格も無きこと此の如し、況んや其の厚かましくも代議士たらんとするをや、吾人は断信す、源某は決して代議士たること能はざるべし（中略）堂々たる帝國の代議士にして苟くも外國の走狗たる名あらしめば、神聖なる議會は決して之を黙々に付せざるべし、必ずや懲罰に附せらるゝか或は公然賣國奴たるの耻を曝らすか二者其一を免れじ、（中略）源某の落選したる暁には彼れ何の職業に従事せんとするか、之を推測するも強ちツマラヌ穿鑿にあらざるべし、吾人の推測する所にヨ據れば彼れ代議士たる能はざる暁には必ずや再びニコライ派牧師となりて糊口を凌がん、知るべし彼れは先天的露國の奴隷たるを、（中略）何を苦んでか形体を日本にして精神を露國の奴隷とする非國民を選擧せんと欲するや、（中略）要するに源某の醜体を演ずる事實は参謀本部之を知り警視庁之を知る、若し夫れ誤つて代議士たるの暁には神聖なる議院は此の事實を以て必ず之を懲罰に附し議院の神性を瀆がすものとして之を排斥せん」（『東奥日報』明治 31 年 3 月 14 日付）



10日に衆議院が解散となり、これを受けて行われた8月10日の選挙でも、やはり第一区（有権者3,580名）から出馬した源晟は、大幅に得票を減らし、わずか21点の得票で落選した<sup>77</sup>。

#### (5) ニコライの日記に見る政界引退後のパウエル源

ニコライが日本にもたらしたロシア正教は「近代化」「西洋化」「文明開化」といった世俗的なものに抗する宗教であった。その正教に、「近代化」「西洋化」「文明開化」を積極的に受け入ようとした日本人が会い、入信した。両者の食い違いは、たとえ当面の間表面化しなくても、どこかの段階で歯車が噛み合わなくなる可能性がある。パウエル源の場合、政界引退後に娘婿のアンドレイ源が神学校教師を辞職したことを契機に、ニコライとの溝が深まっていく。ここでは、『宣教師ニコライの全日記』の記述から、伝教者を辞して政治活動を行ったパウエル源に対して、ニコライがどのような評価をしていたかを跡づけたい。

パウエル源が政界を引退した翌年の1899（明治32）年7月1日、ニコライの日記にはパウエル源の娘婿アンドレイ源珪蔵が神学校教師を辞めたことが記されている。

正教会では1882（明治15）年から1889（明治22）年までに12人がロシアの神学大学に留学しており、アンドレイ源もその一人であった。留学者は帰国後に東京の神学校の教授を務めたが、その中で教役者として正教会のために最後まで働いたのは4名で、その他のほとんどが別の仕事を不得て去ってしまった<sup>78</sup>。アンドレイ源もその一人であった。ニコライは留学経験者が神学校を去るたびに、日記の中で嘆いている。

アンドレイ源の辞職を機に、ニコライはついに神学大学に留学生を派遣することをやめてしまった<sup>79</sup>。

ニコライの日記によれば、アンドレイ源珪蔵が神学校の教師を辞すことを表明した時、その理由として、父パウエル源が「金を要求」しているので神学校より給与の高い仕事に移るのだと述べている<sup>80</sup>。これを聞いたニコライは、パウエル源が伝教者から政治活動に向かったことについて、次のように怒りをもって記している。

父のパウエル源（アンドレイの養父。養子になる前のアンドレイの姓は川崎）も以前伝教者だったが、やはり教役者の職を辞めた、というより、辞めさせられたと言ったほうがよいだろう。かれは何年間も伝教者としての給料を受け取りながら、八戸や青森で市の選挙に関わる世俗の仕事に従事し、教会の金を悪用していたのだ。<sup>81</sup>

パウエル源は、既述のように、伝教者の身分でいる間に自由民権運動にも携わっていた時期があった。彼は教役者と民権運動の両立期を経て、1886（明治19）年に県議会議員に当選してから伝教者を止めたのである。ニコライは、パウエル源が伝教者の身分でありながら政治活動に励んでいた時期の事を指して、「教会の金を悪用」したと語っているであろう。

<sup>79</sup> 「今後〔ロシアの〕神学大学にはおそらくだれも派遣しない。今回の裏切り者である源の穴は、今年の卒業生のうちのだれかが簡単に埋めることができる」（『宣教師ニコライの全日記5』（318頁））

<sup>80</sup> 「試験を終えて部屋にもどると、サンクト・ペテルブルグ神学大学を卒業し、ここの神学校の教師をしているアンドレイ源〔珪蔵〕が来て、教役者の職を解いてほしいと頼んだ。父親が金を要求しており、神学校の職（月に三五円）よりも高額の俸給を得られる職をかれのために探してきたという」（『宣教師ニコライの全日記5』（317頁））別の日の日記の記述から、この時アンドレイ源は、長崎のロシア領事館の通訳の仕事を得たことがわかる。

<sup>81</sup> 『宣教師ニコライの全日記5』（317頁）

<sup>77</sup> 8月の衆議院銀選挙では青森県の当選結果は、3月の選挙と変わらなかった。第一区では、徳差が1,247点、奈須川が1,227点で圧勝した。上掲『青森県議会史自明治二十四年至大正元年』（353頁）を参照。

<sup>78</sup> 上掲『ニコライ——価値があるのは、他を憐れむ心だけだ——』（203-205頁）

同年10月19日のニコライの日記には、パウエル源が賭博で逮捕されたことが記されている。ここでもニコライは、パウエル源に対して厳しい言葉をもって突き放している。

それにしても、パウエル源が入獄しているとは初めて知った。かれが花札賭博で警察につかまったことは、知っていた。かれ自身が葉書で、「好奇心から賭博場へ行ってみたところ、なんたる恥さらしか、つかまった五〇人のなかに入ってしまった」と知らせてきたからだ。それが一ヵ月半ほど前のことだ。どうやら警察はかれを逮捕しただけでなく、入獄させる理由ありと判断したらしい。きょう沼辺書記に聞いたところでは、源はもう三年このかた、賭博に入れあげているらしい。となれば、自業自得というところだ。それにこれは、教会にたいするかれの恥知らずな行為に神罰が下ったのかもしれない。かれは、自分の養子アンドレイ源(旧姓は川崎〔圭蔵〕)に神学校と神学大学で教役者になるための教育を〔宣教師団から〕受けさせてもらったにもかかわらず、すべての約束を反故にしてアンドレイを教会から離れさせ、もっと稼げる他の職場〔長崎の領事館の通訳〕へつけてしまったのだから。<sup>82</sup>

ニコライはパウエル源の逮捕について、「自業自得」「神罰」という表現を用いて、厳しく評価している。政界引退後のパウエル源が、娘婿に金を無心したり、賭博で逮捕されたといった情報は、ニコライの日記でしか確認できないので、事実関係がどのようであったかは不明である。

ただこのようなネガティブな情報が見られる一方で、1902(明治35)年の『公会議事録』の記述から、パウエル源が政界引退後に正教の信仰から離れてしまったわけではなく、その後

も八戸の教会のために働いていたことを窺い知ることができる。『公会議事録』によると同年の公会で、八戸地区の担当者であるボリス山村司祭が「パウエル源 外七名」から提出された「八戸教会提出請願『日時傳教者再任派遣の件』」という案件を読み上げている。ボリス山村司祭は、八戸でパウエル源とマルク関から実情を聞いた上で、日時傳教者を八戸に派遣する必要を訴えている<sup>83</sup>。政治活動から身を引いたパウエル源が、なおも八戸の教会の教勢回復のために尽力していた姿が見えてくる。

八戸の教会の教勢は、実際に行き詰っていたようである。1904(明治37)年4月にマルク関が東京を訪問した折に、ニコライに八戸の教会堂の老朽化と勢いの無さを伝えている<sup>84</sup>。

1908(明治41)年11月4日のニコライの日記には、八戸から本部に手紙が来て「伝教者を派遣してくれるか、報奨金を定めてかつての伝教者でいまは八戸の信徒となっている者の一人を働きに迎えてもらいたい」との請願があったことが記されている。この時も、ニコライのパウエル源に対する評価は、次のように厳しいものだった。

言い換えれば、パウエル源に教会の給与を与えるということで、この源から上述の願いが出ているのだ。源は長年にわたって教会から騙し取ってきた。つまり、俸給を受け取り

<sup>83</sup> 「予も此の間八戸に参つたが、執事等とも相談し、同教會の先輩たるパフェル源、マルク関などの意見をも聞きたり」(石川喜三郎編『日本正教会公会議事録』正教會事務所、明治35年(99-101頁))

<sup>84</sup> 「聖体礼儀のあと、わたしの部屋に数人の客が立ち寄ったが、その中に、八戸の信徒で国会議員の関がいた。関は八戸の教会堂について、教会堂はすっかり老朽化しており、まもなくとり壊されるだろうと言った。その教会の土地は借地で、地主が返してもらいたいと要求している。おそらく信徒たちは新しい教会を建てる方向にいかないだろう。信徒数は少ないし、かれらのところには伝教者がこれまで四人(源、井河、久保、白井)もいたのだが、熱心な信徒はいない」(『宣教師ニコライの全日記8』(50頁))

<sup>82</sup> 『宣教師ニコライの全日記5』(47頁)

ながら、教会のためにはまったくなにもしないのと同然だった。教会に少なからず悪を働いた。たとえば、自分の養子のアンドレイ源を教会のつとめから外し、長崎のロシア領事館に通訳として職に就かせている。アンドレイ源はこちらで教育され、その後サント・ペテルベルグ神学大学で教育を受けたのだったが。それもただ、あちらでは神学校の教師として、こちらで教会がかれに与えていたよりは少し多い給与がもらえるということだけの理由だった。こうして、いまパウエル源は、ロシア語の通訳として各地をごろごろしているこの養子の稼ぎで暮らしている。教会の財布にまた手を突っ込もうとしているのだが、不幸なことにこの財布は以前より中身がずいぶん少なくなってしまっている。パウエル源のような欲深さを秘めた老獺さと知恵が、だれかれのうちに増えてきているからだ。

政界を離れてからのパウエル源に関する情報、とりわけ晩年の情報は非常に少ないため、以上見てきたような『宣教師ニコライの全日記』に記されている情報はたいへん貴重である。とはいえ、アンドレイ源が神学校の教師を辞職してからのパウエル源への評価は厳しさを増すばかりで、不肖の信徒として描かれていった。

パウエル源は政界引退後も、八戸工業学校、八戸町立徒弟学校長、町立図書館長などに就き、八戸町会議員、学務委員なども務めたとされるが<sup>85</sup>、どういうわけか亡くなる年に当たる1918（大正7）年の4月15日に、長崎県に籍を移している。住所は「長崎市南山手町35番地」で、旧ロシア領事館のあった町内に位置することがわかる<sup>86</sup>。娘婿のアンドレイ源を頼って移ったものか、事情は判然としない。なぜならすでに1903（明治36）年に、アンドレイ源は長崎の

ロシア領事館を解雇されているからである<sup>87</sup>。

## 結 語

ここまで、八戸初のハリストス正教徒パウエル源が、自由民権運動に参画し、青森県政、そして国政において活躍した様子と引退後の動きを辿ってきた。明治初期に函館で最初に入信した士族たちは、新政府の方針を憂い、新しい日本の国づくりのために「国家の革新」という大志を抱いた者たちであり、「近代化」「西洋化」を受容する過程で正教と出会った。パウエル源もそのような時代の一人に位置づけることが出来る。ところが、ニコライがもたらしたロシア正教は、「近代化」「西洋化」に抗する宗教であった。これが第一の不協和音の種だったと見ることができる。当初は問題にならなかったものの、種はやがて成長していく。パウエル源の場合、後年に娘婿であるアンドレイ源瑠蔵が神学校の教師を辞めたことを契機に問題が表出した。それ以降、ニコライは、パウエル源の政治活動と正教徒としてのあり方に厳しい眼差しを向けることになった。

正教会の宣教はニコライの采配と日本人教役者の働きによって、明治中期まで勢いがあったが、日清戦争後の三国干渉を経て、ロシアに対する国民の敵対感情が高まったことにより、大きな受難を被ることになる。これが第二の不協和音である。パウエル源の政治活動においても、この第二の不協和音が受難をもたらしした。県政から国政に移ったパウエル源は、日清戦争末期に、地元の期待を受けて青森港を対ロシア貿易港にする嘆願と交渉に奔走し、ロシア通の正教徒であるがゆえの活躍に対して賛辞が送られた。しかしほぼその直後の三国交渉を機に、ロ

<sup>85</sup> 上掲『青森県議会史 自明治元年至明治二十三年』（836頁）

<sup>86</sup> 同上に転籍先の住所が掲載されている。

<sup>87</sup> 「日本の新聞各紙に正教神学大学を卒業したアンドレイ源〔（川崎）圭蔵〕についての記事が出ている。かれは教会に奉仕するという自らの使命に背き、長崎の領事館に誘われて勤めたものの、そこを解雇されたという」（『宣教師ニコライの全日記7』（334頁））

シアを憎悪する国民感情が噴出した。やがて彼は、「売国奴」「露探」呼ばわりされ、政界を追われる身となった。パウエル源という一地方の正教徒の歩みの中に、明治期の日本の正教会が直面した問題が、鏡のように映しだされているようである。

アンドレイ源の辞職はパウエル源の政界引退の翌年であり、ニコライの日記にはパウエル源の金銭要求に触れられていることから、両方の出来事の間には密接な関係があったのかもしれない。その後のニコライの日記の中には、パウエル源に対する厳しい評価や賭博で逮捕されるなどのネガティブな情報が散見される。個人的な日記という一方向的な情報であるため、本来であれば多面的に検証する必要があるものの、残念ながらパウエル源に関する情報は、極めて乏しいと言わざるを得ない。とりわけ、政界を去ってからの動向に関する情報は不十分であり、歴史の階段をさらに下る必要がある。

#### 引用・参考文献一覧

- 青森県環境生活部県史編さん室編『青森県史研究第5号』青森県、平成12年
- 青森県議会史編纂委員会編『青森県議会史自明治元年至明治二十三年』青森県議会、昭和37年
- 青森県議会史編纂委員会編『青森県議会史自明治二十四年至大正元年』青森県議会、昭和40年
- 青森県史編さん近現代部会編『青森県史資料編近現代Ⅰ』青森県、2002年
- 『青森県日記百年史』東奥日報社、昭和53年
- 青森県文化財保護協会八戸支部『奥南史苑』国書刊行会、平成元年
- 石川喜三郎編『日本正教傳道誌卷之壹』正教會編輯局発行、明治34年
- 石川喜三郎編『日本正教会公会議事録』正教會事務所、明治35年
- 石川喜三郎編『大日本正教会神品公会議事録』明治36年
- 伊藤徳一編『東奥日報と明治時代』東奥日報社、

- 昭和33年
- 牛丸康夫『日本正教史』宗教法人日本ハリストス正教会教団府主教庁監修発行、昭和53年
- 大久保利夫『衆議院議員候補者列伝：一名・帝國名士叢伝第3編』六法館、明治23年
- 小川原正道『明治の政治家と信仰—クリスチャン民権家の肖像』吉川弘文館、2013年
- 小野久三『青森県政治史（1）明治前期編』東奥日報社事業局出版部、昭和40年
- 小野久三『青森県政治史（2）明治後期編』東奥日報社事業局出版部、昭和47年
- 河西英通「初期議會下の一東北代議士の歩み：『榊喜洋芽日記』を中心に」『弘前大学國史研究71号』弘前大学、1980年
- 河西英通「青森県の大同団結運動」『弘前大学國史研究80号』弘前大学、1986年
- 木鎌耕一郎「八戸におけるハリストス正教会の宣教と源晟」『八戸学院大学紀要第50号』2015年
- 木鎌耕一郎『青森 キリスト者の残像』イー・ピックス、2015年
- キリスト教史学会編『宣教師と日本人——明治キリスト教史における受容と変容』教文館、2012年
- 佐藤和夫「近代青森県キリスト教史の研究（その一）」『弘前大学國史研究55号』弘前大学、1970年
- 佐藤和夫「近代青森県キリスト教史の研究（その二）」『弘前大学國史研究56号』弘前大学、1970年
- 佐藤和夫「明治初期ギリシャ正教伝道史における士族信徒の政治活動について：三戸聖母守護会記録の一断面」『弘前大学國史研究62・63号』弘前大学、1975年
- 高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館、2003年
- 「東奥日報」紙（日付は各脚注を参照）
- 友田昌宏編著『東北の近代と自由民権——「白河以北」を超えて』日本経済評論社、2017年
- 『七一雑報』新報社、1876（明治9）年2月11日付
- 中里進「郷土の先覚者たち（1）源晟評傳（上）」『世代十四号』平凡会、昭和23年
- 中村健之介『明治の日本ハリストス正教会』教



文館, 1993 年  
中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波書店, 1996 年  
中村健之介編訳『宣教師ニコライの全日記』（全 9 巻）教文館, 2007 年  
中村健之介『ニコライ——価値があるのは、他を憐れむ心だけだ——』ミネルヴァ書房, 2013 年  
日本メソジスト弘前教會『弘前教會五拾年略史』大正 14 年  
『函館ハリストス正教会史 亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来 150 年記念』函館ハリストス正教会, 2011 年  
八戸近代史研究会『きたおう人物伝 近代化への足跡』デーリー東北新聞社, 平成 7 年  
八戸教育史編纂委員会『八戸市教育史（上）』八戸市教育委員会, 昭和 49 年  
八戸市議会編『八戸市議会史記述篇上』八戸市, 昭和 53 年  
八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史近現代 資料編 I』八戸市, 2007 年  
八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史通史編 III

近現代』八戸市, 2014 年  
八戸社会経済史研究会編『概説八戸の歴史下巻 1』北方春秋社, 昭和 37 年  
八戸社会経済史研究会編『写真で見る八戸の歴史 明治・大正の試練』北方春秋社, 1970 年  
ボズニエーフ著, 中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』講談社, 昭和 61 年  
山下須美礼「八戸におけるハリストス正教会の成立と展開—受洗者名簿の記録から—」『弘前大学國史研究 124 号』弘前大学, 2008 年  
山下須美礼「明治初期ハリストス正教会における仙台藩士族の西日本伝教」『歴史人類』40 号 筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻, 2012 年  
山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の間像—北東北における時代変容意識—』清文社出版, 2014 年

\* 本稿は平成 29 年度学校法人光星学院イノベーションプログラム補助金による「八戸におけるハリストス正教関連人物に関する調査と文献研究」の成果の一部である。